

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 「信州の山を安全に楽しむために ～世界水準の山岳高原観光地へ～」

日時 平成28年7月3日（日） 午後2時20分から4時30分まで

場所 キッセイ文化ホール 中ホール（松本市）

目次

1 開会	P 2
2 パネルディスカッション	P 2
・信州の山の魅力と、山の楽しみ方	P 4
・安全登山（山岳遭難防止）について	P 7
・山岳環境の保全と活用	P 13
・これからの「信州の山」への期待	P 18
3 意見交換	P 22
4 閉会	P 39

【参加者】

県民 約450人

コーディネーター 鈴木啓助 氏 信州大学理学部教授

パネリスト 野口 健 氏 登山家

山口 孝 氏 (株) 湊沢ヒュッテ代表取締役

仲川希良 氏 モデル/フィールドナビゲーター

阿部守一 長野県知事

1 開 会

(司会)

皆様、お待たせいたしました。

これより第二部、パネルディスカッションに入ります。

このパネルディスカッションは、日本を代表する、そして世界に誇る山岳県として、長野県の山々や貴重な自然環境に感謝し、山岳環境を守り、育て、活かす視点から、「信州の山」の魅力を再認識し、より安全に山の魅力を楽しんでいただくために、皆様からご提言をいただき意見交換をいたします。

「信州の山を安全に楽しむために～世界水準の山岳高原観光地へ～」をテーマに、全体で2時間ほどの意見交換を予定していますので、よろしくお願いします。

また、このパネルディスカッションは、阿部知事をはじめとする壇上の皆様と会場の皆様がテーマに基づいて会場の皆様と意見交換を行う「県政タウンミーティング」を兼ねております。

パネルディスカッションの後半では、会場内の皆様からもご意見やご提案をいただきながら進めてまいりますので、ご協力をお願いします。

それでは、ここでパネルディスカッションにご参加いただくゲストの皆さんに、ステージへご登壇いただきます。

皆さん、拍手でお迎えください。

ゲストの皆さま、ご着席ください。

ここで、ゲストの皆様をご紹介します。

まず、先ほどの基調講演に引き続きまして、登山家 野口健（のぐちけん）様です。世界の山々のこと、そして清掃登山などの環境のこと、そして長野県が目指すべき世界水準の山岳県について、お話しいただきます。

続いて、株式会社涸沢ヒュッテ代表取締役、また北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会救助隊長の山口孝（やまぐち たかし）様です。上高地・涸沢にございます「涸沢ヒュッテ」のご主人として登山者に接せられており、加えて、遭難者の救助のスペシャリスト 救助隊長としてご活躍です。

続いて、モデル、フィールドナビゲーターとしてご活躍の仲川希良（なかがわ きら）様です。登山歴は6年で、現在は里山から雪山まで幅広く山を楽しんでおられます。信州の山にもよくお出でだと聞いており、山を楽しむ視点からお話をいただきます。

さらに、主催者を代表いたしまして阿部守一 長野県知事でございます。

そして、本日のコーディネートを申し上げますのは、信州大学理学部教授で、

信州山の環境研究センター所長、長野県「山の日」検討懇話会座長でありました、鈴木啓助（すずき けいすけ）様です。

皆様、本日はよろしくお願いいたします。

なお、ゲストの皆様のプロフィールでございますが、詳細につきましては、本日皆さんに配布しました資料に記載しておりますので、参考までにご覧ください。

それでは、これからパネルディスカッションを開始いたします。

なお、本日の意見交換の内容は、後日、長野県ホームページで公開することとしています。会場にお越しの皆様からいただきましたご発言は、個人のお名前を伏せた形で公開いたしますので、あらかじめご承知いただきますようお願いいたします。

では、これから先の進行は鈴木様にお願いをします。

2 パネルディスカッション

（鈴木コーディネーター）

皆さんこんにちは。信州大学の鈴木でございます。

これから皆さん4人の方とディスカッションを進めていきたいと思っております。

さきほど野口健さんから基調講演をいただきました。

生と死と言う非常に哲学的な話から始まって、自分のやりたいことをいかに相手に伝えるかというコミュニケーションの問題、それから野口さんから話がありましたけれど、今日午前中ですね、信州大学の山岳会、ワンダーフォーゲル部の学生、そして高校生、松本の県ヶ丘高校、大町の岳陽高校と、みなさん合わせて53名がワークショップということで、山の様々なことでやってもらいました。

そこでまとまった意見も後ほど皆さんにご提案いただくということにしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今日のイベントは、いままでも何回も話に出ておりますけれども、今年国民の祝日として初めて制定されました山の日、これは海の日は昔からありますけれども、海と山は友達ということで、当然、海の日があってなんで山の日はないのかなと常々思っていた訳ですけど、ようやくできました。

それから、長野県につきましてはですね、もう3年目ということで、信州山の日が制定されております。これは7月第4日曜日ということでございますので、今年は24日がその日になっておりまして、その前後を山の月間ということにしております。

どちらも親しみながら、自分たちが恩恵を受けています山の恵みを知って、そしてそれを感謝しながら、いかにすばらしい自然を次の世代に引き継いでいくかということを考えてみましょうということだというふうに思っております。

今日は4人の皆様と一緒に、山についてのいろいろな側面についてご議論を深めたいと思っております。後ほど皆さんからもいろいろご意見を頂戴いたしますので、ぜひ様々な角度からご意見をいただければと思っております。

まず最初に知事のお話もございましたけれども、信州は全てが山と思ってもいいと、

つまり海に面しておりません。ですからどこにいても山が見えて、山に登れて、山に親しめると。山といっても3,000メートル級の山ばかりではございませんで、ちょっとした自分の家の裏山、里山も含めた山ということでございます。

ですから、そういった信州の山の魅力、3,000メートル級だけでなく、まさに裏山まで含めた山の楽しみ方といったものがどんなものがあるのかなということを、まさに4人の方々それぞれ、8,000メートル級から身近な山まで親しんでおられる方ですので、まず最初にそれぞれの方から山の楽しみ方、それから信州の山の魅力といったものをお聞かせいただければと思います。

もう野口さんには先ほど基調講演をいただきましたけれども、改めて、最初に野口さんから山の魅力とか、信州の山というのはどうかなということをちょっと。

【信州の山の魅力と、山の楽しみ方】

(野口健氏)

まず、信州はあらゆる山があるじゃないですか、もう男性的な山もあれば、例えば北アルプスと南アルプスはまた全然違うじゃないですか。男性的な北アルプスと、非常に女性的と言ひ方はあれですけども、深い森がある南アルプスもあって、八ヶ岳なんかもよく行きますけれども、八ヶ岳なんていうのはアプローチが非常に短くて、それで苔が裕福で岩もあって、要するにバリエーションがもう本当にすごいんですね、信州って。

例えば、僕はその中で印象的だったのが、今日、午前中、学生にはしゃべったかな、しゃべりましたけれども、白山もやっぱりすごい・・・白山は信州じゃないのか、違いましたね。石川県でしたね。

(鈴木コーディネーター)

野口さん、実は、白山も、あとから振ろうと思ったんですけども、午前中に聞いて。実は山口さんと僕も一緒に白山に去年登って、さっき野口さんが学生の前でおしゃべりになったことを我々も同じように感じていたものですから、それとの対比で、ちょっと信州を語ろうかなということも考えていたんですけども。

(野口健氏)

ああそうですね。つまり極めて信州的な山だったのかな。白山に登ったときに、そう、みんな上から登山者がおりてくると、目が合うと「ようこそ」と。「ようこそ」って聞きませんでしたか。すれ違う方が「ようこそ白山へ、ようこそ、ようこそ」と何人もの方がおっしゃるので、普通すれ違うと、「どうもこんにちは」とかと、そんなものじゃないですか、「ようこそ」というのが新鮮でいいなと思って、また、ごみも本当に落ちていないんですよ、混んでいるんですけども。

上に着いて、山小屋の方に「この山は本当にきれいだね」というと、県内の方が多いうんですよ、山に登りに来る人が。で、県外から来た人で、たまにポンと捨てる人がいて、県内から来ている登山者がすぐ拾うんですって。だからもうごみが捨てられない雰囲気というのがあるんですけどって話を聞いたときに、「ようこそ白山」というのは私たちの白山にようこそということだったなと思って、いい山だなと思っていたんです

が、ちょっと場所が違いましたね。

(鈴木コーディネーター)

はい、どうもありがとうございます。いや本当に、実は白山というか、石川県にとっては、そういう意味では唯一の山のようなものなんですよね。長野県の場合にはたくさんあって、3,000メートル級もたくさんあるし、それから百名山もいっぱいあるということで、なかなか「ようこそ」という話は信州でも聞いたことはないんですけど。

仲川さんも信州の山を登っておられますよね。信州の山の魅力を県外者から見てお話しただけですか。

(仲川希良氏)

そうですね、もう7年目になりますけれども、何度も長野の山を味あわせていただいでいて、やはり先ほど野口さんがおっしゃっていたように、一番の魅力は幅広い人を受け入れてくれるということだと思っんですね。

私自身は、夏に例えば槍ヶ岳、アルプスに挑戦してみて、山小屋さんの力を借りて縦走して、標高の高いところの景色を味あわせていただいたり、それから初心者の方だったら、たとえ雪の季節だったとしても、八ヶ岳はそれこそとてもアクセスがよいので、森のすぐ近くまで連れていってもらえたり、それからロープウェイがあるところもたくさんありますね。北八ヶ岳のほうだったり、それから木曾駒ヶ岳のほうだったり、そういう人気のある山がたくさんあるからこそ、いろいろなルートだったり、設備が整備されていて、いろいろな人に対して玄関口を広くあけてくれているような、そんなイメージがありますね。

そして、私自身にとって山の楽しみというのが信州には溢れているんですけども、山を楽しみに来ると同時に、そのふもとに広がっている暮らしも楽しむというのが私にとってすごい醍醐味で、山登りの。

冬の時期、霧ヶ峰に例えばスノーシューでハイキングに行こうとなったときに、すぐに山に向かってしまうのではなくて、上諏訪で温泉だったりだとか。それから霧ヶ峰のお水が伏流水でたくさん湧き出ているので、日本酒の酒蔵がいっぱい並んでいるのをご存じですか。そこで日本酒めぐりをして、山の恵みを味わってから山に上がって、さらにこの自然があるからこそ、ふもとの町が豊かなんだなということを感じられたりだとか、ふもとに広がっている山の恵みを受けながらのその生活、そういう楽しさ、豊かさを味わえる場所でもあるし、その上に広がっている幅広い山の魅力を一遍に味わえる場所というのがこの信州の魅力かなと思っています。

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。そういう意味では、「北アルプスへようこそ」という立場で山口さん、魅力というのはいかがですか。

(山口孝氏)

今、彼女が言った言葉にほとんど、もうそれ以上言うことはないかなという感じで、すばらしいコメントありがとうございます。

本当に信州の山はいろいろな山が楽しめるというか、いろいろな、穂高の山のようにちょっとバリエーションで岩登りもしなければいけない厳しい山もあるんですが、里山でも、本当にこの近辺でいくと、皆さん、多分、歩いている人がいっぱいいると思うんですが、光城山という丘みたいな、散歩で毎日歩いている人もいますけれども、私もこの間初めて、どういうところかなと思って子どもを連れて行ってきたんです。長野県は道が整備されたいい山がいっぱいあるので、そういうところを皆さんが行かないのはもったいないなというような感じがしますね。

これだけすばらしい山に囲まれた場所というのは、この長野県しかないんじゃないかなというふうに。

特にすみません、ちょっと手前みそになるんですが、涸沢へ来る人に聞きますと、やっぱりいろいろなところから来るんですけども、日本の登山者のあこがれの山なんですね、涸沢へ行って穂高に登りたいというのが登山者の最後の終点というか、穂高の山を縦走したいということで大勢集まってきていただけるんですけども、本当に日本全国から来ていただいて、本当にありがたい限りで。

東日本の大震災のとき、それからこの間のいろいろな地震で被害を受けられた方も涸沢まで来て、穂高の朝焼けとか夕焼けを見て元気になったと。本当に山に来てよかったという、本当に信州の山はそういう人々に感動を与えるいいところだなというのを、つくづく山にいて思いました。

(鈴木コーディネーター)

知事の最初のごあいさつの中にもございましたけれども、信州にはたくさん人も物も自然もあるということで、その中で、当然ながら信州、長野県には山岳高原観光課という、山岳と高原を売り込む課をつくられて、阿部知事も一生懸命、先頭に立って行政として頑張っておられるわけですけども。

阿部知事、一言、魅力と楽しみ方、何かございましたら。

(阿部知事)

一言で収まらないので、なるべく短くしますけれども。

先ほどのあいさつの中で申し上げましたが、長野県の山というのは、先ほど野口健さん、環境の話をしていただきましたけれども。環境であったり、あるいは、今、長野県が進めようとしているのが、全国で初めて自然保育の認定制度「信州やまほいく」というのをつくりましたけれども、これなんかはまさに自然の中で子どもを育てるというような、これ子育てとか教育、さっきの五感を磨くという上で、やっぱり山に接して子どもたちを育てたら非常に子どもたちの育ちにとって有意義だというふうに思っていますし、あるいは、今、鈴木先生にお話いただいた観光ですね。

実は、私は山を長野県の観光のメインに据えようということで、山岳高原観光課という課をつくりました。これは普通は、何というか、各部局の主幹課というのは何とか政策課とかとやるんですけども、私は、いや、もううちは山だと、山と高原で長野県を売っていこうというので、その主幹課の名前を山岳高原観光課という形にしましたので、これはほかの県にはない取り組みだろうなというふうに思っています。

まだまだ、そういう意味では、我々行政としても、あるいは県民全体としても、山を

もう一回どうやって生かすのか、あるいは環境の問題とか、子どもたちの教育も含めて、どうやって守り次世代に引き継いでいくのか、こうしたことをやっぱりしっかり考えなければいけないときに来ているんだろうなと思っています。

ここのテーマが魅力と楽しみ方という話なので、私は、自分の経験で言うと、今、ちょうど参議院選挙をやっていますけれども、私も県知事選挙を2回やらせていただいて、長野県、広いですよ、とにかく、それで疲れるんです。疲れて、疲れるんですけれども、結構、山の中を走っている時間が長いんです、選挙カーで。疲れてやる間にブーツとする時間が結構、隣の村へ行くときとか山の中を通ると、ブーツと私なんかは山を眺めているだけで非常に癒されるなというふうに思っていますし、さっき野口さん言っていたように、長野県の山、すごくバリエーションがあって、北アルプスとか南アルプスのような非常に雄大な山岳景観もあれば、あるいは、北信のほうの北信五岳なんかやっぱり柔らかな、黒姫山とか柔らかな雰囲気がありますし、また木曽は木曽で、もうすぐ山が迫っているというような感じで、同じ山といっても、やっぱり長野県、それぞれの地域によってすごく個性があるなというふうに思っています。

これやっぱり、もう一回、長野県としては観光にも生かしていきたいと思ったり、さっき言ったように、環境の問題であったり、子育ての問題であったり、いろいろな資源として生かしていきたいと思っています。

ちょっと県知事として出ているので、少し宣伝させてもらっていいですか。皆さん、今日、パンフレットをいろいろお配りしているかと思いますが、一つは、まず8月11日、山の日、国民の祝日になりますけれども、その全国大会、栄えある第1回目は長野県の上高地で開催と。これは私としては、山の日ができた全国大会はほかの県に絶対持っていかれてはいけないということで、頑張ったんですよ。頑張ったというか、あまり頑張らなかつたんですよ。ほとんど、山の日といえば、それは長野県だよなと、ほとんど人が思ってくれていたんで、ほとんど多分、ほかの県とは争いにならずに決まったと。それだけ長野県の山としての認知度が高いと思っていますが、ぜひ、これ県民の皆さんと一緒に盛り上げていきたいと思っています。

それから、県としても今年で3年目の信州山の日を制定しました。これは7月24日、今年は7月24日で、7月の第4日曜日ですが、7月15日から8月14日までを信州山の月間ということで、これ皆さんのところに配っているんですか。この信州山の日イベントガイドというのをつくっていますので、ぜひ、いろいろな催しがいろいろなところであります。ぜひ、すごく初心者からいわゆる専門家の皆さんまで、いろいろな形で楽しめるイベントが満載ですので、またこういう取り組みにも皆さんご参加いただければなと思います。

信州の山ポータルサイトということで、信州の山で大丈夫です。検索してもらえればいろいろなイベントが出てきますので、ぜひ皆さんにも信州の山、これを機会にもっともっと触れ合っていたきたいというふうに思います。

ちょっと長くなってすみません、よろしく願いいたします。

【安全登山（山岳遭難防止）について】

（鈴木コーディネーター）

どうも、皆さんありがとうございました。

今、皆さんからお話いただいているんですが、信州には非常にバリエーションに富んだ山があって、まさに裏山の里山から、3,000メートル級の山までたくさんあるということでした。

もちろん裏山でそんな遭難するという、いやいや最近ないことはないわけですが、やはり高い山にはどうしても、先ほど野口さんの基調講演にもございましたけれども、危険と常に隣り合わせなわけですので、ですから、とにかく山を楽しむというときには必ずその裏側の危険な面がございますので、それをどう安全に登るかということが必要になってこようかと思えます。

それで次は、安全に山に登るにはどうするかといった側面、それから実際に山口さんはもうずっと、長年にわたって遭難救助の現場で活躍されておられるわけですが、最初に山口さんから、これまでのご経験を踏まえて、山岳遭難の現状とか、安全に山に登るにはどうすればいいんだろうかというあたりのお話をお願いします。

(山口孝氏)

遭難者の現状というところから話をしますけれども。

最近、ちょっと多いのは、持病を持っている方が山にいらっやって、それで、いつも飲んでる薬を忘れてしまったという方も何人か。去年いたのはぜんそく持ちの方がぜんそくの薬を忘れてしまって、夜なんか、せきが出て具合が悪くなったとか、あと心筋梗塞ですか、そういう方がやっぱり薬を忘れて、何か山でもう本当に死ぬ間際になったとかという方はいます。普段飲んでる薬は忘れずに山にも持っていくということが大事かなと。それから、具合の悪いときは本当に無理して山に上がらないほうがいいかなと思います。

誰も遭難するとは思わないで山に登ってくると思うんですが、やっぱり山登りで、遭難しないためのまず第一条件としては、やはり天気の良い日はやめましょう、天気の良いときには無理に山に行くことはやめて、もしどうしても行かなければいけない人は、下の温泉でも入ったり、先ほど彼女も言っていましたけれども、そういうところもいいところがあるので、余裕を持った日程で出かけたほうがいいかなというふうに思います。

ちなみに、私が普段、持っているものを皆さんにご披露しようかなと思ってザックに詰めてきました。私が日ごろ持っているのは、ツエルト、これツエルトというのは皆さん、ほとんど知らない人が多いと思うんですが、これなんです。日本語で簡単にいうと簡易テント、野口さんはしょっちゅう使っていると思いますけれども。あまり皆さん、これご存じないと思うんですが、広げると本当にテントと同じ、これ広げてしまうと、またこれ入れるのが大変なんでやりませんが、缶ビール1本より軽いです。それでこれが1枚あるだけで、夏山も朝晩結構冷えるんですが、これで大体、ひと晩はしのげます。それで一緒に私はこのダウンというのを持っていて、これも、この薄手のダウンでいいです。これをザックの中に詰めておいて、この間も鈴木先生と一緒に宝剣岳のほうまで行ったんですが、風が強くて、天気はいいけれども風が強くて、ここの山ってこんなに風が強いのかと思ったら、「うん、ここの山は毎日こうだ」と言われて、ちょっとびっくりして、それもそこで弁当を食べるとき寒くていられないと思って、ダウンを着たら、もうそれで随分、快適でした。

それとどんな天気がよくても、私は懐中電灯を持っています。懐中電灯。それから私

が最近ちょっと感心しているのは、個人的にアミノバイタルというのがあるんですが、これをうんと疲れたときとか、そういうときにちょっと飲むと、かなり疲労が低減されるかなということで。一応、もし、3人ぐらいで行くんだったら一つあればいいと思います。この中に3人ぐらいはひと晩過ごすことができますので、こういうものも用意されていかれたら、万が一のときには何とか生き延びれるのではないかなというふうに思っております。

(鈴木コーディネーター)

実際に道具まで見せていただいて、安全にいかにも山に登るかということをお話いただきました。まさに安全に登るというのは、つまり自分の体力に合ったことをやるということなんですね。

もちろん山口さん、昔は当然ながらアミノバイタルなんていうのは飲まなくてもよかったはずなんですよ。いや、もう実は僕もそうなんですけど、最近、やっぱり年とともになかなか脚力が落ちて、あの薬は本当にすごいですよね。薬というのか何か知りませんが、あれを飲むと、本当に割りと軽やかに登れるようになって、すばらしいものが世の中に出たなと思っております。

当然、安全に登るためには、その薬だけに頼らずに、やはり自分の脚力をまず維持するというのがやっぱり大事かなと思います。ですから、なるべくエレベータに乗らずに階段を歩くということではないかなと常々思っております。

もう野口さんにはいろいろな話、また、まさに死があるからその生が見つめられるんだというお話を、先ほど基調講演でお話いただきましたけれども。改めて、まさに我々普通の、8,000メートル級ではなくて、3,000メートル、2,000メートル級の山を登るときに何か安全の心得とか、そういったことがありましたらお話いただければと思います。

(野口健氏)

みんな高い山のほうが危ないと思うじゃないですか、でも意外と遭難するのは、そうではないところで遭難することが多いんですよ。だから僕の入っている山岳会も、ヒマラヤに行ったり、ヨーロッパの三大秀峰に登っていた人が、日本に帰ってきて、丹沢の沢登りに行ったら帰ってこなくて、みんなで探しに行ったら本当に数メートル、3メートルぐらいのところから落ちて、頭を打ってそこで亡くなっていましたけれども。本当に、緊張するところは緊張するからハーケンを打ったりとかザイルを出したりとかやるんですけど、意外と緊張しないところでツルツと滑って落ちてしまったりとか、本当にそれが多んですよ、僕の周りは本当に多くて。だから、危険なところが危険とは限らないですね。逆に核心部を抜けて、山を抜けてザイルを解いた後に滑落してしまうケースもあるし、だから本当に気の緩みでしょうね。一番の危険は気の緩みだと思います。

あと、装備で言いますと、いろいろな人を連れて富士山とかあちこちへ行くと、みんな表に見えるものは結構金をかけるんですよ。ヤッケとか、特に女性なんか大変ですよ、競ってしまって、ウエアで。ところがインナー、下着、僕、女性の場合はよく確認していませんよ。ただ、要するにインナーがあれっていう人が多かったですよ。ですから、例えば夏でも、雨が降っていなくても汗をかくじゃないですか、相当。僕はインナーの着替えをすごく持って行くんですけど、汗かきなのでまめに着替えるんです。

ですから、表に、ヤッケとかダウンにお金をかけてもいいですし、と同時にやっぱり下着、インナーをちゃんといいものを持って行って着替えをたくさん、夏でも持っていったほうがいい。特に夏は汗をかくもので。幾ら温かいダウンを着ても、中がびしょびしょだったら意味ないじゃないですか、本当にそういうことでしょうかね。

あとは、もう山小屋の方の意見をもうちゃんと聞くということですね。何年か前に、あれは中央アルプスかな。韓国の登山者が夏、雨の中、強行して何人も亡くなったんですよ。どうしてもふもとにいと、夏だから雨が降ってもそんなに寒いとは思わないかもしれないけれども、上へ行ったらものすごい寒いじゃないですか。風がまたビューと吹いて体温がどんどん落ちますよね。山小屋の方が、こんなときに行くなと言っても行ってしまふ人がいるわけです。山小屋の人が行くなと言ったら行かないほうがいいですよ。一番よくわかっているのが、山小屋の方が。で、山小屋の方が行くなというのに行っちゃって遭難してしまうと、結局、探すのも大変じゃないですか、放っておけないものね。

だから、本当に遭難する人は自分だけが困ることではないので、周りを巻き込むので、だからそこを考えたほうがいいんだろうなと思うんですね。

(鈴木コーディネーター)

仲川さんも山に登っておられて、当然ながら、安全のことも考えつつ登っておられると思うんですけども。

(仲川希良氏)

もちろんです。はい。そうですね、私自身は実はそんなに怖い思いというか、危ないなというようなことに遭ったことはないんですね。というのも、まじめに皆さんの意見をいただきながら、まじめに登っているからだと思ってるんですけども。やっぱり、例えばガイドのついているような状態で登るだとか、自分よりきっちり経験があって自分自身の、私の体力だったり、脚力だったりをわかってきている人と一緒に登るだとか、一人で行かないだとか、そういうことを守って登っているんで、そんなに怖い目に遭ったことはないんですが。

ただ、今までの経験で、怖いことが起こる可能性があるんだなと感じた出来事というのがありまして、私、冬山、雪山にも登るんですけども、デビューが赤岳だったんですね、長野の。赤岳、なかなか雪山デビューにはちょっとハードルの高い山ですけども、きっちりガイドの方についていただいて、しっかり安全な中で歩いていて、無事登頂して戻ってくることができたんですね。

赤岳の頂上の少し手前にある小屋で一泊して、翌日、山頂アタックして、デポさせてもらっていた荷物を小屋でもう一回受けとって下山するというコースだったんですが。頂上アタックする日、朝、外を見たらもう真っ白で、風がすごく吹いていて、これはちょっと無理かなと。私は雑誌の撮影で行っていたので、青空を撮れないとちょっとということで、下山できるギリギリの時間まで小屋で時間を過ごして、ガイドの方もこれは待たうほうがいいと天候は安定するというふうに判断してくださったので、それで、無事、青空の中、登って降りてくることができたんです。

でも、人によっては次の日仕事があるとか、そういうことで焦ってしまったり、もう

これは変わらないだろうというふうに判断されて、私たちより随分前に出ていった方もたくさんいらっしゃったんです。で、小屋まで荷物を取りに戻ってきてみたら、私たちより少し前に出て行った単独の男性が滑落されていて、昨日の夜、一緒にご飯を食べたのという気持ちがその瞬間、バツとわいて、自分自身で、風だったり、雪の質感だったりを体で感じた後だったので、確かにそういうことが起こり得る場所だなというのをすごく実感したんですね。

ほかにも、例えば夏山だったら雷という怖さもありますよね。雷は怖いよ、怖いよと先輩からいっぱい言われていたので、私自身は山の上で、雷がいざゴロゴロと鳴るまであまり具体的に対策を考えていなかったことに気づいたんです。鳴り始めてから、あれ、ヘアピン外すんだっけなとか、私はストック持っていていいんだっかしらとか、いきなり焦りだして、結果的には下山の途中だったので、無事、その雷の被害に遭うことなく無事におりることができたんですけれども、いかに考えていなかったかということを経験して、すごくそのとき実感したんですね。

なので、怖い目に遭う前にやっぱり、いろいろなニュースだったり、それから雑誌で書かれていること、山小屋のご主人が忠告してくださること、全部をちゃんと自分のこととして想像するというのがすごく大事なかなと思います。

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。

野口さんからもお話ありましたように、慣れた山こそ危ないということだと、実は僕も今、思い出して。

僕は出身が山形県で、高校時代、朝日連峰の朝日岳は何十回も登っていたんですね。大学生になって、やっとお酒が飲めるようになって、高校生のときは、当然ながらふもとの温泉宿に、古寺鉱泉という鉱泉があるんですけど、当然、そこは泊まれないので、近くにテントを張って何十回も登ったんですけども。大学生になって初めて酒が飲めるようになった、それでちょっとお金があるので小屋に泊まろうというので、実はその親父さんともものすごく楽しく飲んでしまったんですね。いや、これ次の日、何十回通ったか知れない山道がものすごく怖いというか、当然、これ二日酔いなのでふらふらなんですよ。あんなことは絶対やってはいけないなと思ったのが、本当に今、ふつふつと思い出されました。あのときぐらい怖い山、全然怖くないんですよ、本当に普通の登山道なんですけれども、もう絶対、それ以降は二日酔いでは山に登らないようにしています。ちょっと話が脱線してしまいましたけれども、すみません。

それで、先ほど知事からもお話ございましたけれども、長野県では登山安全条例というのを制定して、皆さんご承知のように、今月7月1日からは登山計画書を義務化すると、もちろんこれは罰則はございませんけれども、義務化するということになりました。

そういった、行政的な方策を牽引された阿部知事から、まさに遭難防止、そして安全に山に登るといったことを、ちょっとお話をいただければと思います。

(阿部知事)

野口健さんを隣にして、私もちょっと一つだけ自分の経験をお話すると、昔、大学のサークルで、お前、下見に行けと言われて3人で鳥海山に登ったことがあったんです。

全く我々、山に登る気構えどころか、単に遊びに行くような感じで行ったので、多分、午後大分遅い時間から登り始めて、山小屋につく前にもう真っ暗になってしまったんです。それで、これはもう私の人生終わったなというふうに正直思ったんですけれども。

ガーガー騒いでいたら、ほんのすぐ100メートルぐらいのところに山小屋があって、まあほとんど笑い話ですけれども、でも暗くなってしまうと全くわからなかったんです。もうこれで、しかも、まだ雪が残っていたので道もよくわからなくなってしまったんですね。そういう経験があるので、やっぱりなめてはいけないというのが基本的にあると思うんです。

そういう中で、今、ご紹介いただいたように、長野県、去年の12月に全国で初めて、総合的な登山安全に関する条例を制定をしました。それに基づいて幾つか具体的な取組をしているんですけれども、まず一つは、この登山を安全に楽しむためのガイドラインというのを、山の関係者の皆様方と一緒に考えてつくっています。これ結構当たり前のことを書いています。余裕ある行動時間の設定とか、まさに私に言われるようなものかもしれないんですけれども。あと必要な食料とか水とかパーティをつくるとか、山に登る上で基本的なことをまとめていますけれども、やっぱりこんなリスクがある、あんなリスクがある。例えば高山病だとか、熱中症だとか、低体温症だとか、道迷いだとか、いろいろなリスクがあるということをもとめて書いてあります。これ、まだ普及版にはしていないんですけれども、これからもっとコンパクトなサイズで皆さんに普及していこうと思っていますので、ぜひ山に登られるときはこのガイドライン、そういえば何か知事が言っていたなと。入手して、ぜひちょっと一読していただいた上で山に入ってもらえればというふうに思います。

それから、この7月1日から登山安全条例に基づいてほとんど山に入るときは指定登山道というのを、168の山岳で122の登山口でつくっています。そこに入るときは登山計画書を出してくださいということを義務づけをしています。ただ、ほかの県でやっているように罰則はつけていません。

やっぱり、山は自由に楽しんでいただくということが私は基本だと思っていますので、何か山に登っている最中に取り締まりに行くと、あなた出していないから罰則だとかというのもちよっといかなものかと思っているので、その代わり出しやすいように、県のホームページからも登山計画書を出していただけるようになっていますし、あるいは『コンパス』とかも使っていただいてもいいですし、ファックスで送っていただいてもいいですし、ぜひ登山計画書を、皆さん出していただくことをぜひ心がけていただきたいというふうに思っています。

一昨年、御嶽山の噴火災害がありました。多くの方々が犠牲になる、大変残念な噴火災害になってしまったわけですが、私が県の災害対策本部で一番、当初、苦労したのはどなたが山に行っているかわからないと。まず搜索救助しなければいけない、搜索救助しなければいけないんですけれども、一体、何人、どういう方を探さなければいけないのかということが最初は全くわからなかったんです。これ登山計画書、皆さん出していただければ、大体、対象者は何十人だなと、こんな人たちが登られているんだというのがわかれば、それだけ救助活動も迅速に的確に行うことが可能になりますので、ぜひ、そういう意味ではこの登山計画書は、皆さんしっかり出してから山に登っていただきたいというふうに思います。

それからもう一つは、長野県の山のグレーディングというのを始めています。要は、ご自分の体力に合った、あるいは技術レベルに合った山に登っていただきたいということで、長野県内の主要な登山ルート102ルートを格づけしています。やっぱりどうしても、最近、中高年の方の遭難も多いんですけども、昔は大丈夫だったからということで、自分の体力を過信されて登られて遭難される方もいらっしゃるんで、自分の体力はやっぱり常に確認をしていただいて、あと自分の技術レベルも自分で把握してもらって、その上でこのグレーディングとも照らし合わせて楽しい安全な登山になるように、ぜひ登る山も自分で選択をしっかりしていただきたいなと思っています。

この取り組みは長野県初でありますけれども、ちょっと長野県だけでやってもいけないので、周りの県にも呼びかけて、今、新潟県、山梨県、静岡県、岐阜県でも同じように山のグレーディングを始めていますし、これをもっともっと広げて、長野県発の日本の山のスタンダードにぜひしていきたいというふうに思っていますので、またこの山のグレーディングということについても皆さん見て、山に登るときは、この山はどういう山なんだなということを知っていただいた上で登っていただきたいというふうに思っています。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。今、お話あったように、まさに山のグレーディングで自分に合った山に登るということ、それから、登山道とか登山計画書ということは、まさにいかに計画を立てるかということでございますよね。いかに何回登っていても、その山がどういう山か、そして登りは何時間、下りは何時間かかるのか、そしてまたいつ行くかということがわかれば、それについての天気が当然、大事ですよ。もちろん雨が降ったらこういう装備も必要だろうということもありますし、いくら晴れているという予報でも山では何が起こるかわかりませんので、そういった装備まで含めて計画を立てるということがまさにその安全に結びつくということでございますので。

ぜひ、出せと言われたから出すのではなくて、本来、山に行くときにはその登山計画は自分のために立てて、それをまとめたものをお出しすると。もちろん、これは出しにくいとなかなか出せないものですから、ぜひ知事を初め、県の皆さんには出しやすい方法をお考えいただいて、多くの人たちが、気軽にといっても変ですけども、簡単に登山のときに出せるようにしていただければなというふうに思っております。

【山岳環境の保全と活用】

それから、当然ながらこれ山の日、まさに山の恵みに感謝するということですけども、その恵みはもちろんのこと、自然環境なわけです。当然ながらおいしい水、先ほど富士山の天然水の話もございましたけれども、その水も当然、山の恵みですし、山に木がたくさん生えていれば、その木が実は酸素をどんどんどんどん出してくれるわけです。それから葉っぱや枝というのは、実は大気中の塵やほこりをうまく、トラップしてくれるものでもあるんです。ですから、山を通過した空気というのは非常に酸素もたくさんありますし、塵やほこりも少なくなった非常においしい空気、これも山の恵みの一つでございます。

ですから、そういった自然の恵みをいかに次の世代に残していくかということが非常

に大事になってきます。これがまさに山の環境を保全し、保全するだけというのはおかしいですけども、全く人が手を加えないとかえってだめだということは、皆さん里山でご経験があるかと思います。人が入って手ごろな例えば下草刈りをするとか、そういったことで非常に健全な山、森林ができるということもございますので、活用しながら保全していくという方策が今後、非常に大事になってくるかなと思います。

野口さんは最近ではアルピニストではなくて、ごみのおじさんというふうに呼ばれているらしいんですけども、改めて。

(野口健氏)

いやいや、ゴミのお兄さんと言われているんです。

(鈴木コーディネーター)

ごめんなさい、まだお兄さんでしたね。というふうに言われているらしいですけども。

野口さんから改めて、この山岳関係の保全、そしてまた活用、こういったことでお話を。

(野口健氏)

そうですね、あと地図を、やっぱり地図を、例えば山に行く前に地図をにらめっこするのがすごく大事だと思うんですね。例えば地図って時間が書いてあるじゃないですか、平均時間みたいな。それを頭に入れておくと、あれは一個の目安ですけども、例えば縦走なんかをするときに、ある程度、地図を見て頭の中に時間が入っていると、その地図に書いてある時間と自分の時間がどれだけ違うかということですよ。地図の時間よりも自分のほうが時間がかかった場合には、目的地、要するに縦走しようと思ったら、まずこうやって地図上の時間で計算するじゃないですか。それがそのとおりにならないということが途中で見えてきますよね。地図を持っていないと、今、どのあたりに自分がいるのかというのが全体の中で見えてこないんですよ。地図を持って行かない人が意外と多いんですよ。特に里山系はなおそうですね。

大きい山のほうが、むしろ結構、標識がちゃんとしていて、里山って意外と標識がもう古かったりとか、隠れていたりとか、もう腐ってなかったりとかするんですね。ですから、本当に里山のほうが迷子になる人が結構いるんですよ。ですから、本当に地図を持っていくというか、事前に計画の段階から地図を見ながら、完全に頭の中でその全体像をつかんでおくというのはすごい大事なことです。

あとは、例えば計画の段階で、もしこのあたりで雨がフーッと降ったらどっちへ逃げるかとか、避難小屋はどこにあるかとか、要するにある程度、例えばさっきの中央アルプスで遭難した韓国隊の話ですけども、もし彼らがどこに避難小屋があつてとか、全部そういうのを仮につかんでいたら、途中からそっちへ逃げることもできたかもしれないですね。だから基本的に山は最悪のことが起きるということ、ある程度考えておけばいいと思うんですけども。

(鈴木コーディネーター)

まさに、地図というのは非常に大事で、皆さん、若い人は最近はまだ町の中でもスマホを見ながら、町の中だとあれすごく便利らしいですね、どっちに行けば地下鉄の駅があるとか、レストランなんかもやるらしいですけども、あそこに行きたいときは見ると。でも、これ山で便利かという、例えば電池がなくなったらそれすぐに充電するところがないですよ。それから、おそらくあれ濡れたらだめなんじゃないかなと思うんですけども、地図というのは、紙の場合は大丈夫なんですよ。それで磁石も持っていれば、地図と磁石があれば、おそらく山はどんなところでも行けるはずなんですけれども、その地図の読み方がまずわからないと困るので、最初はやっぱり地図もちゃんと読めるようになって、登山計画書を書きましょうということで、また話が戻ってしまいますけれどもそういうことですよ。

実際に、もう何十年の山小屋に携わっておられる山口さん、いかがですか。

(山口孝氏)

先ほど野口さんにごみのお話をさせていただきましたけれども、まず、そうですね、上高地から上については、もうほとんどごみがないですね。上高地には、山小屋を含めた「上高地を美しくする会」というのがもう設立されて60年ぐらいたつんですけども、この会に山小屋も上高地の旅館の方も全部入っているんです。それでひと月に2回でしたか、ごみ拾いの日があって、各施設からみんなごみ袋を持って拾い集めているので、上高地から穂高の山にかけてはもう本当に、ごみを探すほうがまず難しくなっている。それほどきれいになってきました。

一応、各山小屋に置いてある焼却炉、これも本当に環境にやさしい、やさしいというか、ごみをそこで燃やしても、二次燃焼で煙突からまた燃やすので、煙がほとんど出ないというような。ガスの出るような発泡スチロールとかそういうものはもう全部ヘリでおろして、下で処理しているということです。ごみについては北アルプスのところはもう何の問題もないといっておかしいけれども、ほとんど完了いたしました。

トイレについても、昔の山小屋、先ほど野口さんも言うておりましたが、本当に垂れ流しの状態でやってきたんですが、今はもう全部改良されて、環境にやさしいトイレになりました。うちのトイレもほとんどが洋式のトイレになりましたし、トイレがきれいになったことも、仲川さんみたいな山ガールが増えた原因かなと。

もう一つ、やっぱり環境というか、自然環境を守るためには何が一番大事かという、私は登山道の整備が一番大事だと思います。登山道がきれいに整備されていれば、そこから横に踏み出る人はまずいません。そこにきれいな花が咲いていても、そこからきれいな花まで行って取ろうとする人もいないし、もう本当に道の整備だけちゃんとやっっていけば、やっぱり自然は守られるというか、山の美しい姿というのは保たれるのではないかなというふうに常々思っていて、登山道の修理が私の仕事だと思っています。

(鈴木コーディネーター)

今、山ガールという話も出ましたけれども、山ガールって今、あるのかどうか知りませんが、代表の仲川さんから。

(仲川希良氏)

そうですね、私自身は普段東京に住んでいるので、山に囲まれているような生活ではないんですね。そういう人が山に行く良さの一つに、土地のつながりが感じられることというのがあると思うんです。やっぱり一度行った場所とか味わった場所というのはすごく具体的に想像できるようになって、例えば自分の家で、家のそばの空に月に輝いていたときに、この月は槍ヶ岳をどういうふうに照らしているだろうかとか、そういうことが、私、槍ヶ岳、お月見登山したことがあるんですよ。中秋の名月に合わせて、あえて行ったことがあるんですけど、やっぱり一度、そういうことをやっていると、具体的にあの場所は、今、どんな感じなのかなとか、そういうことが想像できるようになると思うんですね。

やっぱり都会に住んでいたりだと、普段は山に囲まれていないと、山というのはまるですごく特別な場所、何かすごく素敵な異世界のようなすばらしい植物が咲いていたり、すばらしい空気があって、全然違う場所と思いがちなんですけども、やろうと思えば、歩いて自分の家からでも行ける場所なんですよ。土地がつながっているから何日も何日もかければ、自分の家から槍ヶ岳まで歩くことだってできなくはない話ですよ。だから、その土地がつながっているということ、あそこは確かにある場所で、今、自分の家がある場所とつながっている場所なんだなということを想像できるようになると、その山の環境というのが、自分の家に全く関係ないわけがないと皆さん思うと思うんです。

さっきお話したみたいに、霧ヶ峰の美しい湿原を通ってろ過された水が上諏訪の町でおいしい水として出てきたり、お酒をつくっているというように、山での環境というのは必ずふもとの町だったり、そこにつながっている自分が住んでいる家にまで必ずかかわっていることだと思うので、そういうことを意識しながら山に登るようになると、山の立ち居振る舞いというのは必ず変わってくるんじゃないのかなと思います。

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。長野県では、先ほどの登山条例という面だけでなく、まさに山岳の環境整備というのにも非常に力を入れていただいておりますけれども。

知事から長野県の山の環境整備の施策をちょっとお話いただければと思います。

(阿部知事)

山口さんから登山道が一番大事だというお話があって、私も、何というか、さっき言ったように山を生かすというふうに考えたときに、登山道をどうするのかなというのが、一番の課題だと思っていました。

登山道整備というのは、山口さんをはじめ山小屋の関係者とか、そういう人たちが、何というか、義務化されているわけではないけれども、自主的にやっていただいているというのが今までのやり方なんですよ。それでは限界があるなというふうに、私は思ってきていました。

今回の登山安全条例の中でも、山岳環境の保全をしっかりとやっていこうというところで、山岳の環境保全及び適正利用の方針というのをつくったんですよ、条例に基づいて。これは登山道整備も含めて、山の関係者の皆さんと一緒に考えてもらって、

しかも登山道という、登山道というのは普通の道路と違って、みんな舗装してしまえばいいとか、みんな立派な道をつくればいいという話ではなくて、ほとんど自然のまま残したほうがいい場所もあれば、バリアフリーでどなたでも上がっていただけるようにしたほうがいい場所もあって、そこも必ずしも全ての人の意見が100%一致しない場合ももしかしたらあるので。であれば、山の関係者の皆さんが集まって考えてもらう必要があるなということで、山域連絡調整会議というのを条例上つくることになっていて、山口さんも入っていただいているんですね。

要は、ここはこういうふうに整備しようと、山の将来像を、ビジョンをやっぱり山の関係者でまずつくってもらおうと、そういうことがまず最初の一步だと思っています。実は行政が何で登山道整備におよび腰かという、自分でおよび腰と言ってはいけないかもしれないけれども、および腰だったかという、何か手を加えて、そこで事故が起きると設置管理をしていた人の責任みたいになってしまうので、何かちょっと変な、放っておけば誰も責任をとらないですけども、ちゃんと整備すれば整備した人間が何か事故が起きれば責任をとるとというのが、今の、裁判とかになるとそういう話になってしまうので、なかなか行政、そういうことに手を出しづらかったところがあるんですけども、今回、この条例もつくって、山の皆さんとも一緒になってどこをどう整備しようかというコンセンサスを経て、そういう中で登山道の整備を、我々県もちゃんとお金を出しながらやっていくという方向に、舵を切りました。

今、登山道の整備については、これ実際に踏破して現場を確認してもらったのが約110ルート、1,000キロ以上のルートを確認してもらって、そうすると、まずちゃんと整備しなければいけないという危険箇所が300カ所、長野県内にありますので、まずはそこをしっかりと整備していこうということで、これは去年から計画的に整備を始めています。

ちょっとまだまだ長野県内の登山道、大丈夫かというところはありますけれども、かつては、多分、何年待っても何も変わらないという状況が続いていたと思いますけれども、今回、条例もつくって、今、申し上げたような仕組みもつくって、我々行政としても登山道整備を県の施策として明確に位置づけましたので、着実に登山道の整備はこれから進んでいくことになると思います。ぜひ皆さんも、ちょっとここはどうなっているんだとか、これはこんな状況ではおかしいんじゃないのということがあれば、どんどんご意見を逆にお寄せいただければ、我々しっかり取り組んでいきたいというふうに思っていますので、ぜひよろしくお願いいたします。

それからもう1点、それと関連して、今度はこの山の日にも関連して、「みんなで信州の山岳を守ろう！キャンペーン」というのを始めています。これはさっき申し上げた、その山の保全、登山道にしても、あるいは高山植物の保全にしても、あるいは野口健さんがされているようなごみの問題にしても、何か一部の人たちが頑張っている、ほかの人たちは、ただ山へ登って楽しんでるだけという形になっていたんですけども。やっぱり山に登られる方、山へ行かれる方は、山を愛して自分たちも何かしたいという方たちが多く、そういう方たちにも一緒に協力してもらって、この信州の山岳を守ろうという取組を始めています。

例えば今度、7月6日に白馬八方尾根では、高山植物の名前を記したラベルの設置を一般の人たちにも参加してもらって、その地域の人たちだけでなく、山に登る人たちにも協力してもらってやってもらうとか、あるいは、今度7月16日には南木曾岳で、

登山道の整備に関連して、資材の荷揚げを一般の登山者にも協力してもらってやっていこうというような取り組みを始めていますので、これからこの仕組み、この仕組みというのは山小屋関係者とか一部の人だけでなく、山に登られる全ての人たちに、ちよつとずつでいいですから、山の環境を守る取組に協力してもらおうということを、県も率先して呼びかけてやっていこうと思っていますので、ぜひこういう取組にも皆さんにはご参加をいただきたいと、我々ももっとこれからしっかりPRしていきますので、よろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

【これからの「信州の山」への期待】

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。いろいろとお話いただいているうちに、時間というのがあつという間に過ぎてしまっているんですね。

そろそろ、この上だけの議論はそろそろ閉めたいと思っています。もちろんたくさんお話しいただくことがございまして、後半は皆さんからの質問に答える形でご意見をいただきますので。

ちよつとその前に、今日は、これ題名が信州山岳サミット「信州の山を安全に楽しむために～世界水準の山岳高原観光地へ～」という未来系なんですよね。ですから、信州の山の未来への夢とか、期待とか豊富とかというあたりを、今日のパネラーの皆さんに一言ずつお話いただいて、パネラーだけのディスカッションを閉じたいと思いますけれども。

野口さん、最初によろしいですか。信州の山の未来、これ山岳観光地へという将来系なので、未来系でものすごく何か夢みたいなものはありませんか。信州の山ですよ、信州の山ね。

(野口健氏)

はい。人間対策はもう大分進んだと思うんですよ。マナーもよくなってきたし、トイレの対策も進んだし、あとは今、知事がおっしゃった登山道ですよ。やっぱりこれから考えていくと、人間対策もそうですけれども、鹿、鹿がすごいですね。本当に、もう年々増えるのかなと。多分、冬が大分暖かくなってきて、冬を越せる鹿も増えたと思うんですけれども。食害ですよ。もう信州の山も本当に至るところが、これは信州だけじゃないんですけれども、森が本当にピンチだと思うんです。太い木も、表面の皮を一周食べられたら、それきりもう死ぬしかない運命じゃないですか。だから本当に、一周こつやつて皮を食べられると、みんな立ち枯れしていますよね。八ヶ岳もそうだしほかもそうですよね、もう立ち枯れが本当にすごいんですよ。

だから、あの鹿を何とかしないと、もう人間の出す、山に出すごみなんていうもんじゃないですよ。別にごみはそのままでも木は枯れませんが、そうは簡単には、鹿によって森が死んでいくんですよ。だから、本当にこれからかなり真剣にやっていかないと森がなくなりますね、信州に限らず。

誰が撃つのかという話で、鉄砲持ちも高齢化してきていますし、僕、東京都レンジャーというのをやっていまして、東京都でやっっている、東京都の森を守る隊員のメンバーなんですけれども。鉄砲撃ちさんにお願ひするんですけれども、もうかなり高齢化して

いるんですよ。ヘリで彼らに乗ってもらって山の中に上がってもらうんですけども、鹿って、ピョット言うじゃないですか。ピョット言うと、ピョピョと言うんですよ。合図を送っていてサーッと逃げてしまうんです。だから鹿を捕まえるといってもそう簡単ではなくて、特に年配の方は、やはり山を走るようになったら、まず無理ですよ。本当に無理。なので、誰がどう捕まえるのかですよ。罠、罠でも、要するにちゃんと罠を仕かけた場所に定期的に行かなければいけないじゃないですか。だから本当に、これかなり組織的にやっていかないと、そこに予算をつけるとかをしていかないと、あとは鉄砲撃ちを育てるとかをしていかないと、本当にこの森はもう、意外とこれが、僕は一番、最大のピンチだと思うんですね。

(鈴木コーディネーター)

ではちょっとその問題、知事に最後にまたお答えいただくことにして。
山口さんちょっと、もうちょっと何か明るい話題はないですか。

(山口孝氏)

明るい話題、明るい話題というか、ちょっとさっき言い忘れたことで、山を楽しむために皆さんにぜひ実行してもらいたいことがあるんですね。

皆さん、山に出かけると、自然に普通は全然知らない人とすれ違っても「おはようございます」とか「こんにちは」とか、何か素直な気持ちであいさつするじゃないですか。だから山に行ったらどんな人にも声をかけながら行くと。

最近、穂高の辺で事故が多いのは、すれ違いざまの事故というのがあるんですね。それとあとペースの遅い人を後ろからペースの速い若者が追い抜いて、その若者が落とした石が追い抜いた人にぶつかってしまったという、やっぱりそういうのをいろいろと見ると、すれ違いざまは基本的には登り優先なので、下る人が山側に体を寄せて待つと、絶対待つときには谷側で待たない。谷側で待つと、もう落ちます。私の知り合いでも亡くなったカメラマンがいるんですが、それは下から子どもが登ってきて、北穂の下りで帰りなんですが、それで子どもを避けるために彼は谷側のところの石の上に乗ったんですね。それがコロッと転がって、もうドンと落ちてしまった。もう即死です。

そういう状況を見ていると、やっぱり山の基本というか、すれ違うときは、私は登り優先でなくてもいいと思うんですよ。その場所によって、両方で判断する。登り優先、登り優先といったら、もう登る人は休む暇がないじゃないですか。だから、その辺は臨機応変で待つ。だから待つときは必ず、どっちでもいいけれども、もう山側で待機していますということを、それと、できたらお互いに気持ちよく山に登りたいので、譲ってもらったら「どうもすみません、ではお先に失礼します」とか、その声かけというか、やりとりがすごく大事なんですよ。譲った人が「お先にどうぞ」と言ったら、譲ってもらった人は「ありがとうございます、私も先に行かせてもらいます」というような、そういう会話をもっともっと、登山者同士で交わしてほしいなということをつくづく思います。すみません。

(鈴木コーディネーター)

ぜひ皆さん、山に行ったら、今の山口さんの言葉を思い出していただいて、あいさつ

するというのを、まさにすれ違うときにどうすればいいかということをやっ
ていただければと思います。

仲川さん、ちょっと、もうちょっと明るい話題を何か。

(仲川希良氏)

楽しいお話にしましょうか。そうですね、私は、これからも長野県に伺わせてい
ただいて、こちらで山をたくさん味わわせていただきたいなという、来る側の気持ちなん
ですけれども。

先ほどお話しみたいに、やっぱり山を味わうということは、その土地につな
がっていき、ほかのことも味わうことになると思うんですね。さっきお話し
したみたいに、ふもとに広がっているその豊かな暮らし、後ろに山があるから
こそ、私たちはこういう生活をしているんだということを、きっと地元の方
が意識しながら、そのご自身の生活の魅力的なところ、こんなおいしい
ものがあるよとか、こんな暮らしができますというのを、山を意識されな
がら私たちにPRしてくれたら、その暮らしごと、きっと私たちは山を
楽しみに行けるとし、それから、具体的にアクティビティでいったら、
山から川がおりてきていて、そして長野には諏訪湖だったり湖があつたり、
海はないですけども、その土地というのはつながっているものですから、
山を意識しながら例えば川でのアクティビティ、カヤックしてみたりだ
とか、それから山の魅力を受けながら生活している人たちの様子を見な
がら、里を自転車で走ったりだとか、いろいろなアウトドアアクティビ
ティ、全てやっぱり山の恵みを受けているからこそできるものなんじゃ
ないのかなと思うんですね。

なので、山が魅力的な県だからこそ、それがいろいろなものに影響して
いるんだということアピールした上での、ほかのアクティビティというのを
ぜひ楽しませていただきたいなと思っています。

(鈴木コーディネーター)

どうもありがとうございます。ではそれでは最後に、まさに世界水準の山
岳高原観光地へということで、長野県としての豊富をちょっと知事から、
最後にお聞きしたいと思います。

(阿部知事)

では、その前に野口健さんのご指摘の鳥獣被害。これはもう行政にお
いては、いまや、特に農山村へ行くと最もニーズが高いのがこの鳥獣
対策、何とかしてくれという話です。これは山の話だけじゃなくて、
農業、林業、そういうところにも相当影響していますので、これは我
々もしっかりと取り組んでいるところです。

この間ずっとやってきたのは、どっちかというと柵で囲いますと。ど
っちかという、本当は動物を柵で囲わなければいけないんですが、最
近は人間のほうが柵で囲われている感じになっていますけれども。

畑の被害、農作物の被害は、ひと頃よりは被害額としては減ってきて
いる状況です。ただ山側ですね、これから問題は。山側は、どっちか
という追いやるほうだったんですけども、今は高山植物だったりとか、
あるいは例えば、我々守らなければいけない

ライチョウにもいろいろな動物がアクセスして被害を受けているというような状況になっているので、全体としての生態系をどう守っていくのかということが大きな課題だと思っています。

さっき、猟師さんというかハンターの話がありましたけれども、実は長野県はハンター養成学校というのを県としてやっています。ご指摘のとおり、猟友会の皆様方はかなり高齢化しているのですが、今日は若い人たちが多いので、自分も猟をやろうと、ハンターをやろうという人はぜひ、ちょっと今年の募集はもう終わってしまっていると思いますけれども、来年度またやりますから、ぜひハンターを目指して取り組んで、一緒にこの鳥獣被害対策に向き合ってもらいたいと思いますし、もう一つは、鹿はいっぱいっているんですよ。何万頭という単位でとっているんですけども、捕って埋めているだけになっているので、今、長野県はジビエ振興で食べようと、あるいは肉だけでなく、もっといろいろな生かせるものに生かそうと思っているんですけども。

今度、近々、移動解体車、ジビエで食べるときに、やっぱり捕ってその場で処分しないと、なかなかおいしく食べられないというのがあるので、今、移動解体車をトヨタの皆さんが研究されています。許認可は県がやるので、今、許認可、ちゃんと受けられるようになるように、我々から助言をさせていただいて、今、つくっています。近々できると思いますので。またそういうジビエとしての活用も含めて鳥獣被害対策、広くやっていきたいと思っています。

ちょっともう一回、山の話に戻すと、私はこの世界水準の山岳高原観光地ということをや、やっぱり長野県の観光の大きなキャッチフレーズにして取り組んでいきたいと思っています。

そういう中で、今、先ほどお話しあったように、私は長野県をアウトドア県にしたいと思っています。アウトドア県に私したいと言っているんですけども、なかなかまだできていなくて申しわけないんですけども。それがさっき言ったように登山道整備みたいなことを、登山とかトレッキングももっともっと親しんでもらえる環境をつくっていきたいと思いますし、それだけではなくて、例えばマウンテンバイクだったりサイクリングだったり、あるいは湖とか川とか、先ほどちょうどご指摘いただきましたけれども、カヌーとか、カヤックとか、ラフティングとか、あるいは、あまり長野県はそういう宣伝をしていないんですけども、釣りをすると山ほどあるわけですよね。

さらには、もうちょっとアクティビティから広げたアウトドアで行くと、最近、例えば阿智村の人気スポットは星空観光ですよ。あれなんかまさにアウトドア、しかも山の上で星を見ているからすごくきれいに見えて、あれは山とアウトドアならではの星空観光ですし、駒ヶ岳ロープウェイでは、毎年、山の上で結婚式をやっています。アウトドアでの結婚式ということも長野県からもっと広げられると思いますし、そういう意味で、私はアウトドア県にしていきたい。この世界水準の山岳高原観光地ということで、世界に向けて発信していきたいと思いますし、そのコアの概念のとしてはやっぱりアウトドア県ということをしっかり持ちながらいろいろな取り組みを進めていきたいと思っています。そのベースはやっぱり山ですね。山、その源は全て山ですから。

来年はちょうど、JRグループ各社と長野県とで一緒になって、大型観光キャンペーンとしてのデスティネーションキャンペーンというのをやります。このテーマは「世界級リゾートへ、ようこそ。山の信州」です。ちょっとこれは私のこだわりもあって、フ

ニヤフニヤ何だかわけのわからないことをいっばい言ってもしょうがないから、もう長野県は山、山、山だということなので、このDCキャンペーンも山の信州にしています。

ぜひ、この山の日だったり山の信州であったり、これからもっともっと発信をすると同時に、長野県の山の魅力をもっともっと磨きをかけていきたいというふうに思っています。

皆様方に引き続きご協力をいただきたいと思いますので、よろしく申し上げます。ありがとうございました。

3 意見交換

(鈴木コーディネーター)

どうも、知事、ありがとうございました。

それでは、あとの後半、約1時間ございますけれども、皆様方と一緒にディスカッションしていきたいと思っております。

実は、最初に申し上げますように、これ県政タウンミーティングということも兼ねておりますので、知事とか皆様とパネラーとの間でちょっとご議論を進めていきたいと思っております。

最初に、お話ございましたけれども、午前中は朝日新聞社、それから長野朝日放送の主催で「未来メディアカフェ」ということで、大学生と高校生、53名がグループに分かれてワークショップを開いております。そこで各班でいろいろなことを話し合っていて、その中から提言といいますか、こんなことをやっていただいたら、もっと信州の山が楽しくなり安全になり、環境が保全できるのではないかとといったようなことをまとめたいただきましたので、最初に学生さんのほうからその提言のお話をいただいた後に、一般の皆様からご意見をちょうだいしたいと思います。

そうしますと、これ順番がありますか、どうぞ、今のマイクが行きますので、マイクを持って、すみませんけれども、差し支えなければ名前と所属とかおっしゃっていただいて、ご意見をいただければと思います。では、お願いします。

(信州大学山岳会 男性)

我々は若者が山に行きたくなるような仕掛け、優遇措置について考えました。そこで出た提言が、県が山小屋に補助金を出していただいて、マイテントではないという条件つきで、ユース割引を行っていただけたらなというふうに思いました。

若者が山に行く上で一番問題となっているのは、金銭面です。昨年、北アルプスでは多くの山小屋がテント場料金を値上げして、一人1泊1,000円というのが一般的な金額となっています。特に具体例としては、我々は8月に2週間前後の縦走を行うのですが、テント場代の金額だけで15,000円近くかかってしまって、食料を切り詰めたとしても、2万円では収まらないという状況になっております。

我々は山に行くときは4～5人テントなどを持っていきます。最近ではマイテントが増加していて、スペースがいっぱいになってしまうことがあるようです。そこでマイテントではないという条件つきで県から補助金を出していただき、学割制度をつくって

ただければ、我々ももっと山に行きたい、山に行きやすい状況になるなというふうに思いました。よろしくをお願いします。

(鈴木コーディネーター)

確かにこれすごい切実な訴えですけども、まさにテント場も実際に管理されています山口さん、今の提案はいかがでしょうか。

(山口孝氏)

まあ、そうですね、涸沢は特に日本で一番でかいキャンプ場を持っていますが、秋の多いときは、そうですね、1,000張りを超えるテントの方が見えます。でも最近、さっき学生さんが言っていましたけれども、一人一張りで来る人がすごい増えたんですね。涸沢のあの広いキャンプ場だったら何とか許容範囲で収まるんですが、これを稜線の北穂のキャンプ場とか、それから穂高山荘のあの庭のある狭いキャンプ場でやられてしまうもので、もうテントを張られたら後から来た人はもう張るところがないというか、先に着いた人の、先着順になってしまっているもので、非常にちょっと問題がある。

それで、皆さんご存じのように何でそんなに料金が高くなったんだという一番は、先ほど言っているトイレの話なんです。トイレについては、私どものトイレは全部、汚物を全部ヘリで上高地へおろして、業者に全部きれいにしてもらって、また上に上げてくるという、このヘリ代がものすごいかかるんですね。それで協力金としてテント代にそういうのを全部含めたり、それからあと水、この水も山の上のほうから水を、私がもう40年ほど前に水を探し当てて、この水源を確保した。それを集めて、それを使ってもらっているんですが、それもすごい大変な努力なんです。水の利用料とトイレの使用料と、全部含めてそういう値段で設定してきたんですね。

で、今、学生さんがおっしゃっている若い者が2週間テントを張ると、一人1,000円だと、それだけでもう14,000円かかってしまうから、ちょっと何とかしてくれないかという話はよくわかりますので、私個人としては何とかしてあげたいなと。それで、皆さんのように、だって、昔、テントというのはみんなワイワイガヤガヤとみんなで同じテントで騒ぐのがテントの醍醐味なのに、何でマイテントになってしまったのかなというのはちょっと寂しいんですよ、私としても。皆さんのように、3人、4人で来て、その中で知らない人たちと寝泊りしながらワイワイ騒いで食事する。これやっぱり一つ、テントの醍醐味だったんですが、今はそういうものがちょっと薄れてきたのが寂しいなと思います。

個人的にはというか、何とか優遇したいという気持ちでいっぱいでございます。わかりました。

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。これ、うちの学生なんでなかなか言いにくいんですが、知事、いかがですか、この切実な学割制度。

(阿部知事)

いや、山口さんが優遇してあげたいと言っているので、山口さんにまず優遇してもら

うのが一番早いような気がしているんですけども。

僕は、例えば山の山岳環境の保全とか、あるいは山岳観光の推進に関して、例えば県が何もしないつもりは全くないんです。むしろ、ちゃんと税金でやるべきところは税金でやったほうがいいんじゃないかというふうに思います。

ただ、今の山口さんの話を聞いたり、あるいは皆さんの提案も、私が来るのでいきなり県の補助金と言っているんだと思いますけれども、いきなり県の補助金の前に多分、もう少し考えることがあるんじゃないかなというふうに思うんですよ。あるいは、例えばテントも、今の話だと一人用テントとそうじゃないのと料金設定、違えるとか、あるいは、学生が学生の分を割り引いたら、ではほかの分の人たちは、ちょっと申しわけないけれども、上げさせてもらうとか、これちょっとこれ行政とは関係ない世界ですけども。

さっき山口さんが水とかトイレの話をしていられたので、私はむしろそういうところを、例えば山自体が長野県の共有財産で、かつ、いまや日本全国、あるいは世界からもお客さんが訪れる場所ですから、多分、もう少しそういうところにはパブリックな視点で税金を投入するということは、多分、考える余地があるのではないかなというふうに思うんです。そうすると、間接的に山口さんのところに何か補助金を出せば、その分で今の皆さんの希望を山口さんがかなえてくれるとか。

何というか、世の中、もっとこうしたいなと、学生の皆さんだからあえて言うと、世の中、もっとこうなったほうがいいなというのはいっぱいあるんですよ。そのいっぱいのことを全部、いや税金でやればいいねと、補助金をくださいねと、多分、ここにいる人たちはみんな、うちの前の道路をこうしろとか、それでやったら、もう幾ら税金とっても足りなくなりますから。まずその前に、どういう仕組みがいいのかとか、ということを考えて、では皆さんのコストを下げた分は、本来、誰が負担すべきなのかというのをいきなり県民の負担にするのがいいのかというところからして、多分、よく研究する余地があるのかなと思うので。

提案は、私は別に皆さんに、いやそんなもの、これぐらい出せと言うつもりはないので、皆さんの思いを実現するために、どんなことができるのかというのはもう少し幅広く、さっき野口健さんの話だと、やっぱり自分のやりたい活動をどうすれば人にお金を出してもらえるかというのをすごく考えられたということもあるし、そういうことも含めて、私は冷たくするつもりはないので、また山口さんともよく相談しますけれども、そういう幅広い視点でぜひ一緒に考えたほうがいいなというふうに思います。

(鈴木コーディネーター)

とりあえず、今年の夏は学生証を持っていくと。とりあえず、それが何が起こるかは私は・・・

(山口孝氏)

そういうことです。鈴木先生とちょっとそれ、学生証はちゃんと持ってきてねと言ってありますから。

(鈴木コーディネーター)

ということですので、よろしくお願いします。

では次の方、お願いできますか。

(信州大学ワンダーフォーゲル部 男性)

私たちの班では、安全登山のための啓発活動をするというテーマでディスカッションを行いました。安全登山をするとか遭難を未然に防ぐということで、一般登山者の人にも登山計画書のこととか、山の魅力だけでなく、危険のことについても知ってもらうにはどうすればいいかということをお話ししました。

特に山に興味のない人とか、登山のノウハウが十分でない人にも知ってもらうために、メディアというものの力を注目しました。例えばテレビでドキュメンタリー番組とかCMを流すとか、「岳」に続くまんがを描くとか、山の歌をつくろうとか、いろいろなアイデアが出たんですけども、今回、提案したいのは、登山に関するアプリを開発できないかということをお考えしました。

コンパスという登山計画書を提出するためのアプリが既にありますがけれども、私たちはさらにそこに、情報提供のサービスをできるようなものがないかというものを考えました。遭難情報とか危険箇所などの情報とか、あと計画をつくるときに、どういうふうにつくればいいのかというのを情報で閲覧できるようなアプリです。さらに、私たちのような組織で登山をしているような人たちの情報提供、つまり行動記録であったりとか、感想とか反省といったような現場の声も届けるようなことができればと考えています。

同じようなことをやっているサイトも一応、存在するんですけども、さらにそれを発展させて洗練させて、県警とか長野県とか、あるいは私たちのような登山組織同士であったりとか、あるいは普通の個人も、そういう組織と組織とか、組織と個人もつなげてくれるような、そういう情報を得たり発信したりできるような場として、そういう手軽なアプリがあればいいなと考えたので、この場で提案させていただきました。よろしくお願いします。

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。話の中身はよくわかるんですけども、アプリという言葉が聞いた段階で、もうこの年になると、ちょっとついていけないところがあるので。

仲川さん、アプリから始めて、ちょっと今のご提言を読み説いていただけますか。

(仲川希良氏)

そうですね。私自身、やっぱり山登りの計画を立てるときに、インターネットで情報を得ることがすごく多いんですね。なので、若い方に限らずだと思んですけども、直近の登山道がどうだったかというのを、既に最近、行った方たちのレポート、ブログだったり、それからそれを報告するようなサイトがほかにありますけれども、そういうもので確認して、もちろん、それだけを信じるわけにはいかないんですけども、そういうのを参考にされている方というのはすごく多いと思うんですね。それがスマートフォン上でアプリとしてまとまっていて使えるように、情報を得られるようになるというのはすごくいいことだなと思います。

その情報を得たいという気持ちはすごいポジティブというか、これから楽しく行く、山に向かっての気持ちなのでみんながやることなんですけれども。それに対して、そのアプリを使っていると必然的に安全対策についてとかの知識が入ってくる。もう必ずそこに目を通しながら計画を立てることになるというようなつくりになっていたら、すごくいいアプリになるんじゃないのかなと思いますね。安全登山だけだとやっぱり敬遠してしまうというか、それ以前に計画自体とか楽しみたいことがいっぱいありすぎて、あえてそのアプリを入れようとならないかもしれないですけど、最近の山の楽しい情報とともに、そこに来るとこれに気を付けなければいけない、今登山道はどうなっているという安全面の情報があればいいアプリになるんじゃないのかなと思います。

(鈴木コーディネーター)

そうですね、やはり使っている人は全然違いますね。まだお兄さんはわかるんですね。お兄さん。

(野口健氏)

アプリって何ですかね。アプリってそもそも何？触ると・・・アプリのページってなんでしょ。

(仲川希良氏)

そうですね。どう説明すればいいんでしょうか。一つの機能がまとまっているシステムにポンとアクセスできるようなイメージですかね。自分でキーワード入れて一生懸命検索しなくても、例えば登山計画・安全登山みたいなアプリがあったとして、それをポンと打つとそのシステムにすぐ接続できるみたいな。

(野口健氏)

その中にそういう系がいっぱいダーツとあって、そこから探すんですか。

(仲川希良氏)

その中で情報を探したりだとか、もしくは外部から情報がアップできるような形になっていたら、みんなの情報がそこに集まってくるというかたちになるんじゃないですかね。私、あんまり詳しくないので合っているかわかりません。イメージですけど。想像されているアプリがそういうアプリかちょっと定かではないので、もし補足が必要があったら。

(鈴木コーディネーター)

知事、登山計画出すってちょっと遊びじゃないですけど、ですから出しやすくなる、また若者が飛びつきやすくなるようなことはいかがですか。

(阿部知事)

そうですね。さっきもちょっと言いましたけど、長野県登山計画書を出しやすくするように、日本山岳ガイド協会のコンパスを経由しても登山計画書を出してもらえよう

になってまして、ちょっとまだ県のホームページは私はまだ改善が必要だなと思うのですが、県のホームページからも出していただけます。ちょっと、先ほどの方にお聞きしたいんですけど、その、特別なアプリケーションを作りたいんでしょうか、とにかく何をしたいというのが具体的にあるんですか。

(信州大学ワンダーフォーゲル部 男性)

まず、始まったのが登山計画を簡単にらせるアプリがあるといいよねという話をして、そこでコンパスというアプリがあるよと知ったので、さらにそういうものに情報を自分から得たりすることとか、あとは登山が終わった後の情報とかそういうものを一緒に見えたり送ったりすることもできたらいいよね、という・・・

(阿部知事)

コンパスとかヤマレコとか結構そういう君が今発想してるような取り組みというのはかなり出てきているので、自分の知恵をもっと入れればもっとよくなるということなら県からまた紹介しますので。我々の資料いろいろ見れます。こんなアイデア使えないと言われるかもしれないけれど、その時にはちょっといい提案してね。さすがは信大だと。よろしくお願いします。

(鈴木コーディネーター)

ということで、結局自分たちに降りかかってきてこれすごい提案しないとやばいよ。ぜひ、自分たちが使いやすくなるような、自分たちで実際に山登っているわけですから、ぜひ反映させていただければと思います。では、次の方はいかがですか。

(信州大学山岳会 男性)

私たちのチームは未組織登山者の問題、登山技術を学ぶ場所を作るというテーマについて議論しました。山登りの楽しさの1つに自分の成長に合わせて登る山をステップアップしていけるというところがあると思います。で、私たちのような大学の山岳会に入っていたり、社会人山岳会に入っていたり、高校の部活でやっている人たちというのは、先輩やOBの人に連れられて行くことで、どんどん自分のスキルをステップアップしていくことができるんですけども、そうじゃない個人の登山者の場合には、そういうのを指導してくれる人が身近にいない場合には適切な登山のステップアップとなる指標が存在していないというのが現状だと思います。そこで、私たちの班では登山者が目標となる山に登るための前提となる山を決めて少しずつ技術向上していけるようなステップアップ百名山というものを提案します。ステップアップ百名山というのは具体的に言うと、例えば、ステップ1乗鞍、ステップ2燕、ステップ3常念、ステップ4槍ヶ岳みたいなように設定してもらって、ステップ毎に登山者が身に付けるべき技術とか装備などを示してあげることによって、少しずつ登山の技術を上げていく指標になるようなものを作ってみるといいのではないかと提案です。こういうものを県で作っていただいて、県のホームページに掲載してもらって、それを雑誌や各山小屋や、山のショップさんなどのホームページとかSNSなどにリンクしてもらって広告を行えば、皆さんも見ることができるのではないかと思います。

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。ステップアップ百名山という素晴らしいネーミングまで提案されましたけど、これこそまさに野口さんは得意なところですよ。

(野口健氏)

いいですねこれ。僕ら山岳会とかに入っていると、まあ、特に大学の山岳部っていうのが行きたいからといっていけるわけではないですよ。まず、合宿計画書を作ってそれをもってOBのところに行くんですね。それで、OB会が開かれてOBがよしと言ってOBから「はい」をもらえないと合宿しちゃいけないんですね。こういうところ行きたいなと言うと意外と最初はハネられるんですよ。無理だ無理だと言われて、その前にこれとこれとこれを登らないとってですね、学生の1、2年生の頃はイジイジしたことはありますよ。行きたいのにといいながら、でもなかなか行かせてもらえなかったですので、学生の山岳部というのはちゃんとステップがあるんですよ。今は山岳部とか所属しない方は多いじゃないですか。ガイドを付けるわけでもなくて、個人で訪れているのかな、そうすると僕らみたいなOBという重しがないと、いきなりよくわからない厳しいところに行っちゃって遭難するケースって出てくると思うんですよ。となるとこのステップアップ百名山は非常にわかりやすくいいんじゃないかと思いますね。

(山口孝氏)

この中で、この山に登るのはこういう格好で行こうとか、それぞれだんだんとグレードを上げながら、最後の山に行くときはここでヘルメットを被るとか書いてあるし、まあ、だいたい基本的にヘルメットは山には被っていった方がいいと思います。漫画でね、僕が槍ヶ岳に行くまでっていう3000メートル級の山をチャレンジするのに、彼はどういう風にしてきたんだっていうのが漫画で訴えるのもまたいいなと。一番は見やすい、取りつき易い、いわば、山を全然知らない世界の人が、山の世界を知ったのは『岳』という漫画を見てこんな素晴らしい世界があるのかと、あれはレスキューの部分がメインとなっていますが、基本のスタンスは山っていいところだよっていう、こういう世界があるっていうのを、若者に知らしめてくれたのかなという感じがするので、こういう漫画でステップアップして一個ずつこれを登って、次はこれを登って次こっちに行きましようというスタンスはとてもいいと思います。

(阿部知事)

皆さんとてもいいとおっしゃっているし、私もいいと思います。ステップアップ百名山だと他の県にも行っちゃうので、キャッチコピーとしてはステップアップ信州百名山にぜひしてもらいたいなと・・・さっき、山のグレーディングの話をしましたけれども、たしかに体力レベルと技術レベルとしても道筋が見えにくいですよ。自分の最終目標をどこにおこうと、例えば穂高縦走だっという目標を置いたときに、とりあえず、そこまで体力も技能もないけど、どうやってしたらいいかこれだけ見ると分かんなくて、モデル的にこういうステップアップもありますねっていうのも考える必要あるなと思いましたので、アイデアもらってやらせてもらうようにしますので。ありがとうございます

す。

(鈴木コーディネーター)

ということで早速採用されましたよ。では次の方をお願いします。

(信州大学山岳会 男性)

私たちの班は北アルプスなどの山岳地帯の貴重な自然を守るためにはどうしたらよいかというようなテーマで議論しました。それで、私たちの実体験を少し最初に話し合っただけですけども、登山道を自分たちが歩いている、さっき北アルプスの登山道ではゴミが少ないみたいなそういう話はあったんですけども、意図的に捨てられたゴミではなくても例えば、ザックに付けていたタオルが取れてしまってそれが道に落ちてゴミになってしまったとか、ポケットからでた飴の袋がゴミになってしまうとかそういう不可抗力で出てしまうゴミというのを結構見かける機会が多いという話になりました。そこで私たちはエコツアーをもっと開催してはどうかという結論に至りました。エコツアーは野口健さんがやられているような、ゴミを一般の方と拾って、山を綺麗にしようというツアーを、県の方で主催していただいて、僕たち県内の大学生や高校生、または一般の山岳会の方々の協力のもと、そういうツアーを開催できないかというふうに考えました。ゴミ拾いをしながら登山を楽しむというのを趣旨としつつ、自然に親しめるようなイベントツアーをしたらよいのではないかというふうに考えて、それはなぜかという、山の自然環境とか登山自体にあまり親しみのない人には山に親しむ一つの機会になったり、同時に山登り問題に接する良い機会となって登山者自身の意識を変えていくのに良い機会になるのではないかなと考えました。午前中の野口健さんのお話の中で、テレビとかバラエティー番組で実際にそういう活動を発信することで新しい若い人であったりとか子どもであったりだとか、そういう新しい方々にも参加していただけるということから、テレビやインターネット、あとはツイッターなどのSNSも使って宣伝することも良いのではないかというふうに思いました。

(野口健氏)

ごみ拾いですか？ごみを拾うのが僕の趣味ととっている方が世の中多くて。おかげで北海道から沖縄まで清掃キャンペーンに日本中から呼ばれて結構大変なんですよ。

でもごみ拾って分かりやすく、最初は僕も単純にごみ拾いから始めるんですけど、富士山で拾ってるじゃないですか、ごみを拾っていると、ごみを拾うだけではごみがなくならないんですよ。もっと多くの方が捨てますからね。ごみを拾いながら、例えば富士山なら、どうすればごみが出ない仕組みが作れるか、とかね。活動しながら、「どうすれば、どうすれば、どうすれば・・・」っていうのが、例えば富士山レンジャーみたいなのができてパトロールするとか。あとはこういうのは県警もなかなか動かなくて、山梨県警ですね、なかなか摘発できないとのこと。でもこの清掃活動はこうやっていくとみんな動いて、最近になってやっと不法投棄の摘発が始まったりですね。

富士山は人が多いので、何人以上・何人未満である程度人数制限した方が良いのかとか、入山料取る・取らないとか、日本中でやる必要はないと思うんですけど、富士山に関し

ては必要かなと思います。

要するに、ごみ拾いから段々そういうところに入っていくんですよ。だから、いろいろ一つのきっかけに、どうすれば自分たちの山を守っていけるのかっていう仕組みまで入っていけると、みんなもっと踏み込んで関心を持つから良いと思うんですけどね。

(阿部知事)

さっき山口さんとお話したら、うちの県はごみがそんなにないじゃないか、っていう話があったんですが。ごみの話はもちろん大事だと思いますので、さっき言ったようにごみの話だけじゃなくてもっといろんなことやらないといけないので、山では。

さっき事例として挙げましたが、登山道を整備するときに資材を山小屋の人たちばかり頑張らせて上げるんじゃないかと、山を守るみんなにも上げてよ、あるいは植物を保護するのに柵を立てたり、そういうことにも協力してよ、とですね。山を守っていくうえで、ごみ拾いも大変需要もありますし、最近もうちょっと違う観点で必要なことが増えてきているので、今日は信州大学の皆さんからいろんな提案をいただいたので、信州大学と包括提携させてもらって、一緒に信州の山を綺麗にするっていうのをですね、信州大学は、山好きの人たち、皆さんみたいな山岳会とかワンダーフォーゲルの人たちはもちろん、長野県の山が好きだからといって信州大学入ってくる人たちも多いので、ぜひ信州大学とそういう話をさせてもらいますので、その時にはぜひ協力してください。

最初にあったテント場料金の学割について、何もしないで割引だけするって発想がまず……。こういう活動を信州大学でやるなら、信州大学の学生証もって行った方が良いでしょうけど、そういうことは……。山口さん、良いでしょうね。

あるいはさっき提案があったSNS、アプリの話も、とにかくアプリ作れば良いっていう話でもないで、例えば、ごみの削減とかをみんなに協力を呼びかけるためのアプリだとか、成果が上がったらそれを発信するためのアプリだとか、皆さんいろいろ提案していただいたものを、それぞれぶつ切れでなくてトータルするともっと良いアイデアがでてくる、具体化できそうな気がするので、そこはしっかりまた一緒に考えたいと思いますし、山口さん協力してくれますよね、場合によっては野口健さん巻き込んでぜひ一緒にやりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

(鈴木コーディネーター)

知事ありがとうございました。大学っていう場合、先生方っていうんじゃないかと、今回やはり学生の意見を入れた形でやってくださいというのも、知事の方から大学の執行部の方に是非お願いします。自分が言うのも変ですけど、よろしく願いいたします。

それでは早速、皆様からご意見を頂戴して。ご質問でも結構でございます。野口さんへのご質問でも結構ですし、知事に対するご意見、ご質問。それから、今日お話いただきました仲川さん、山口さんへのご意見、ご質問でも結構です。できれば拳手をお願いできればと思いますが、いかがでしょうか。

(立科町 女性)

こんにちは。蓼科山のふもと立科町からまいりました。私、学校登山の指導をさせていただいてるんですけど、もともと私も移住者で、長野に来て小中高と学生時代を過

ごす中で、学校登山で山に接する中からまた、信州の素晴らしさに惚れ込んで、今信州で子育てをしているのですけれど、今学校登山がかなり減ってきているとお聞きするのですが、そのことを知事はどうお考えなのか、知事や野口さん、仲川さんがおっしゃるような、信州の素晴らしい自然を皆さんにお伝えするためには、県民がこの自然の素晴らしさを分かっているなければ、というのはすごく思うので、そういう場を作るためにも、学校登山は素晴らしい場所だと私は思っているのです、ぜひ支援していただければ良いなと思っています。

(阿部知事)

私はさっきも言ったように、子どもたちの森のようちえんも含めて、学校登山も含めて、長野県の子達が、長野県の山だとか長野県の自然に触れ合う機会を増やしていくというのはすごく重要だと思っています。

なぜ学校登山が減ってきてしまうのかというと、学校の先生の負担が非常にありますよね。それと同時に、私は長野県生まれではないのですが、長野県生まれの人たちに聞きたいのですけれども、学校登山について大変だったから山嫌いになっちゃった、という話も聞くんですけど、それはどうなんですかね。そうだとする人はどれくらいいるんですかね。県民の皆さんいますよね、長野県民で学校登山行ったことある人どれくらいいます？その中で、私が間接的に聞くには、学校登山大変だから、山嫌いになっちゃったという人、そういう人っているんですか。いる？嫌いになった人。2人、それだけ？学校登山良かった人、それから山好きになった人？

(仲川希良氏)

今日いらしてる方は皆さん山好きなんじゃないですか？

(阿部知事)

結構ね、ハードで嫌いになっちゃったという人もいるわけです。私は基本的に子どもたちが山に登るのはいいことだと思っていますのですが、やり方を考えながら、昔は良かっただけではなくて、未来志向で考えていく必要があるかなと思ってまして、学校の先生は今何でも過重、負担感が多いんですよ。昔に比べるとやる事が多くなっていて。そういうことを考えると、地域の人たちとか、あるいは信州大学の学生も今日いますが、まず学校登山を支える人たち、その仕組みをちゃんと作った方がいいと思ってますし、それからさっき体力レベルに合ったと言っていますが、子どもたちにまずこういうところでこういうものを見せたりということを各学校がちゃんと考えなければいけない。今までやっていたから単純にそのまま継続してやるのではなくて、将来に向けてどうするかということは今考える必要がある。これは教育委員会所管なので越権行為になるのであまり私が勝手なことを言えませんが、教育委員会には私から今みたいな趣旨で話すようにしておくので、またそのときには協力してください。よろしくお願いします。

(野口健氏)

八ヶ岳にはジャージ軍団が山ほど来ていましたね、中学生とか。それがどんどん減ってきましたね。学校の先生たちともしゃべったことがあります、そうすると、足をく

じくとか怪我をするリスクがあるが、何かあると親が大騒ぎする。学校にするとしんどいですね。学校は嫌がっているというよりも、けが人の出るリスクが高まるとか、ガタガタ親が言うとしんどくなりますよね。親の原因もかなりあると思いますよ。

(仲川希良氏)

私自身は学校登山で妙高に行って、その時はものすごい天気が荒れてしまったので撤退することになって、いつかリベンジしようと思っている山なんですけど、やっぱりそれで嫌いになった同級生はたくさんいましたね、天気が悪かったせいもあって。ただ今のお話で思い出したのが、私自身トークショーとか登山学校も開催しているんですけど、ご自身も初心者とか、昔山をやっていて、お子さんが生まれたので、自分の子どもと一緒に山に登りたいというので、勉強し直しに来てくださるご両親というお客さんがすごく多いんですね。自分の子どもを連れていくと思ったときに、改めて山について知らないなと思ったりだとか、これではちょっと安全に対する知識が足りないなと思って、登山学校とかトークショーに参加してくださる方というのはすごく多くて、それこそ、小さい子だって人それぞれ体力が違うと思うし、頂上に立つのが好きな子もいれば、虫とたわむれていたり、水で遊ぶのが好きな子とか、いろいろいると思うので、本当は学校登山という大きい場で、たくさんの子が山に触れ合う機会があるというのはすごく素敵なことだと思うんですけども。

まずぜひ、ご両親が自分の息子さんだったり、娘さんだったりをその子の好きな場所、そして体力に見合った場所に安全に連れて行ってあげるといふのから始めると、やっぱり連れていくとこういふいいことがあるなといふのを実感されて、学校登山といふのは必要なんじゃないかしら、みたいな波がまた大きく起こるのではないのかと思うので、ぜひ、もし実感されているんだとしたら、周りのお友だちを誘って登山学校とかに参加していただいて、少人数でもぜひお子さんを山に連れて行っていただきたいなと思います。

(鈴木コーディネーター)

どうもありがとうございます。それではほかにございませんか。

これ、せっかくの機会なんですよ、すごくいい県政タウンミーティングで・・・どうぞ。

(男性)

家は松本なんですけれども仕事は東京なので、松本都民みたいな存在なんですけど。

3つほどちょっと聞きたいことがあります。1つは医療の関係、安全の問題ですね。これは山口さんのほうにいろいろ聞きたいんですけども。

実は、僕はちょっと医療関係なもので、日本登山医学会というところがあるんですけど、これ壇上の5人の方、皆さんにもちょっと聞きたいんですけども、その中で認定医制度というのがあるんです。日本登山界の認定山岳医制度、ご存じの方はいらっしゃるんですか、5人の中で・・・

今、もう設立して6年目になるんですけども、国内で国際認定が30人、国内認定が30人と、認定山岳医というのはその程度、今、日本にいます。これが問題は活用がされ

ないというか、まず認知されていない。それと、きちんと使い道がなく、僕らがみんなパトロールしようかと、そんな低レベルの話しか出ていないんです。遭難対策協議会とかそういうところに、僕らの努力が足りないから連携がとれていないだけというところがあるんですけども、何かもっとうまくやっていけないかというのがあるので、また後で、フロアでもいいんですけども、そのあたりのことをもう少しそういうシステム、認定山岳医の、それを利用していただけるようにしていただきたいというのがあります。それは今の学校登山の話にも当然かかわってきますし、僕らは手弁当でもみんな出かけます。休みさえとれば、ですから、そういうのをうまく使ってもらいたいというのが一つ、これは医療関係の安全面のこと。

それから次は、地方の活性化ということとも関係してくるんですけども。僕は学生時代、山岳部に入りたくて信州大学に来たんですが、当時、山というとやっぱり上高地と白馬とか、あの頃はまだ白馬（はくば）だった時代なんですけど、白馬。それと、やっぱりもう一つの大きなあの長野県の登山の玄関というのは大町だったんですね。今、その大町というのは本当に廃れている状態で、あそこは高瀬川溪谷から北鎌とかというのは日本のアルピニズムの揺籃の地ですし、何かもうちょっとうまくできないかと、活性化していただきたいというのがあるんです。

特にせっかく県の山岳総合センターというのがあるんですけど、県内では知られていても全国レベルでどれだけ登山者の人が知っているかということ、非常に寂しいところがある。僕なんか考えると、ああいうところで、例えば全国的なクライミングウォールがありますね、クライミングウォール、そういったところでそういうロックフェスティバルを開いたり、あるいは先ほどの学生さんから提言されたような、いろいろな登山学校的なことをもっと全国レベルでPRしてやっていく。それとあわせて、高瀬溪谷をもう少し整備していただいて、僕が学生のころは、本当にまだ高瀬ダムをつくっているころで、大型トラックの横を歩きながら北鎌とか先天出合のあるほうへ向かったものなんですけど、ぜひもうちょっとあのあたりを何とかしてもらいたい。

それと、最後はちょっと行政的な話にやっぱりなるんですけども。先ほどからも安全の問題とか、登山道の整備とかいろいろ出ていますけれども、最後はやっぱり自己責任なんですね、登山というのは。それをやっぱりきちんと忘れないでいただかないと、阿部知事が心配したように、何かあったときに責任を問われてどうこうとか、そういうのは出てくると思うんですが。やはり登山は楽しい、信州は美しい、みんなで山に行こう。でも、安全は自己責任です。きちんと保険には、山岳保険にも入ってきちんと備えてくださいと、これはやっぱり見落としてはいけないところだと思うんです。

今回を見ても、保険等は別個に入ってはいますけれども、長野県でそういう山岳保険に入っている登山とか、そういうのをもっと全面に出して、自己責任であるということをはきちんと言って楽しみましょうという姿勢をとらないと、やはり知事が心配されたような問題というのは、どんなに道を整備してもこれは出てくると思うので。

それとあわせて、学生から出ていたテントの問題とかそういうのも、今のエコ登山とかそういうのにしても、やっぱり僕らは一番敏感なのは、ある程度のリターンがあるといいわけです。例えばポイント制にしたり、エコ登山をしたり、あるいはそういうテントや何かの登山計画書を出したらば一定の割引をするとか、宿泊のときに、何かそういうのを、小屋の負担にならないように県のほうで何か財政的なバックアップができれば、

おそらく登山計画を出したりするのも、何も1泊するのに100円も安くしろとかではなくて、ちゃんと出していれば1回10円でも何でもいいと思うんです。何かそういうようなシステムというのを考えてもらえると、うまく連動していくんじゃないかというふうに思います。以上です。

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。認定山岳医だけじゃなくて、認定山岳看護師も今度、長野県からお一人出ましたよね。ですから、そういうのも含めてちょっと、ではご指名ございましたので、山口さん、まずその山岳医。

(山口孝氏)

私どものほうは東京大学医学部の夏山診療所というのがありまして、大体、夏の間ひと月、7月20日ごろから8月終わりごろまで来て、ドクターが代わる代わる来ています。いろいろなドクターが来るんですが、一番ほしいのがやっぱり外科とかそういう先生がほしいんですが。もう目の専門の先生やら、耳の専門の先生やら、みんな来るんですが、まあその間は一応いいんですね。秋の紅葉の忙しいときはドクターがいないんですね。

それで、去年ですけれども、トイレに入ったおぼさんが、泊まった方が、トイレに入ってちょっとかんだら、脳内出血を起こして、もうトイレのドアをぶち破ってボタンと倒れて出てきたんですね。仲間の方が気がついて、これやばい、やばいと言って、それで寝かして、それでもドクターがいないので、これ夜の話なので、どうすると。とにかくちょっと宿帳を見て探そうとって、それで宿帳にちょっと職業を書いてもらっているんで、医師というのがいらっしゃっていて、その先生のところへ行ったら、ちょうどその先生がもう休んでいたんですよ。夜の9時ごろだったので。起こして、ちょっと先生、今、具合の悪い患者がいるんですが先生は何の専門ですかというのと、脳外ですというんです。それで偶然です、偶然です、本当に。それで先生、ちょっと診てくださいとって、これは完璧に中で出血していますと。それでどうしたらいいですかといたら、もうとにかく冷やして、このままゆっくりここで寝かして、ゆっくり横に寝かしていけば、多分、大丈夫だと思いますよと言ってくれたので、まあ朝まで何とか、周りの人がちょっとかわるがわる看病しながら・・・

(鈴木コーディネーター)

今、認定山岳医を何とか活用できないかと・・・活用してもらえないかと。

(山口孝氏)

その話ね。だから・・・

(男性)

診療所の医者は基本的には診療所で、診療所の医者は基本的に診療所で診たり、あるいは災害のときに出るDMATの医者はそのふもとのところで安全なところで降ろされてきた患者を診るわけですけども。

認定山岳医というのは、直接救急救助隊と一緒に現場に行けるというのが僕ら基本に

なります。ですから、遭難対策協議会の方がパトロールするときも一緒に行ったりとか、県警が出ていくときに現場に一緒に行けることができるというのが僕らの資格になるんです。僕らの認定山岳医は冬の登はんができるかできないか、それだけの違いです。

(山口孝氏)

本当につくづく、ぜひ協力体制をつくっていただいて、本当にそういう緊急のときとか、それから一緒に、皆さん当然山のお好きな方なので、救助隊の人と一緒に山を歩いてもらったりすれば、宿泊の面倒ぐらいは私もちよっと見てあげたいなというふうに思っていますし、ぜひそういう、せっかく立派な、山の好きなお医者さんがいらっしゃるんだったら、これはやっぱり活用する手はないんじゃないかなというふうに思っています。ぜひよろしくお願ひしたいと思います

(鈴木コーディネーター)

ぜひ学校登山へという話もございましたが、先ほどのお母さん、学校のほうにもせっかくですから、認定山岳医も行ってくださるというようなことをちょっと学校に教えていただけると、手弁当で行くと言っていましたので、ものすごくいいと思います。ぜひ。

それから知事、山岳センター、今は県ではなくてちょっと指定管理になりましたけれども、一応、これは県外でも活動しているんですよね、今、そんなことも含めて、ちょっと知事からお願ひできますか。

(阿部知事)

そうですね、認定山岳医の皆さんの活用のところは、手弁当で本当に全部いいかといったらそうでもないですね。そこはちょっと、私は、せっかく有資格者の皆さんには活躍していただきたいと思っていますし、あれ御嶽の再搜索のときも一緒に山に登っていただいた、あの方は認定山岳医だったんじゃないかと思ひますけれども。やっぱり何というか、山域でのやっぱりいろいろな医療活動には、やっぱり専門家の皆さんの知見は極めて大事だと思っていますので。

さっきから申し上げているように、世界水準の山岳高原観光地をつくろうということで、世界水準というのはやっぱり安全・安心もしっかり担保されてこそだと思っていますので、そこはちょっとしっかり頭に置いて、皆さん、手弁当でやってくればどんどん頼みますけれども、多分そうもいかないと思ひますので、どういう仕組みをつくれればいいのかというのは、ぜひちょっとまたお知恵を貸していただければと思ひますので、一緒に考えていきたいと思ひます。

それから大町山岳総合センターについては、結構、今、登山に関する技術的な教育も含めて、ひと頃よりは活動は少し活発になっているんですが、ただ、ご指摘あったようにまだまだ、山岳県信州としては寂しい状況ではないかなというのは、私もご指摘のとおりだと思ひます。寂しい状況というのは、要するに県外に対しての知名度とかアピール力というのはまだまだ小さいなというふうに思ひますので、そこは我々工夫していきますが、例えば、さっきステップアップ信州百名山みたいな話があったので、例えばそういうものの講座をつくるとか、もっと県外の人にもアピールできるような総合センターにしていくように工夫をしていきたいと思ひます。

それから自己責任の話がありました。先ほど申し上げた、登山を安全に楽しむためのガイドラインでも、この自己責任のところはかなり強調させていただいています。とはいえ、さっきの登山計画書とかはもっと出してもらうようにしなければいけないんですが、実は登山安全条例の中で、保険も入ってくださいということを書いています。先ほども話がチラッと出ていましたけれども、例えば計画書を出すときのインセンティブみたいな話と例えば保険の話、保険にどうやって多くの人に入ってもらうかということと、多分、全体的に登山される方が計画書を出したり保険に入ったりというのを、強制ではなくて、インセンティブで誘導していくということが多分、大事だと思いますので、少し、ちょっとまだ条例をつくった段階で、あまりそこまで正直行って工夫できていないんですけれども、ご指摘をいただいたような観点で、ぜひ検討していきたいなというふうに思います。

何か、例えば、登山計画書をしっかり出しているような人たちは保険料が割り引かれるとか、あるいは保険にちゃんと入っている人たちは、さっきのテントの割引だとか、何か個別にやっていると、あまり解が出てこないんですが、多分、いろいろな仕組みを横で並べてつなげると、もう少しいいインセンティブが考えられると思いますので、ご指摘、十分参考にして考えていきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

(野口健氏)

本当に自己責任のことは本当にもっと考えたほうがよくて、なんでもない遭難、いや本当の遭難じゃない遭難、ちょっと足が痛いとか、その程度の場合はタクシーのかわりに呼ぶ人が本当に増えているんですね。

僕は、アコンカグアへ行ったときに高山病で倒れた人がいたんですけれども、その隊がレスキューを呼ぶんですよ。軍のヘリが飛んでこっちに向かっているときに金銭交渉が始まるんですね、衛星電話で。それで向こうが幾らぐらい払えといったら、それは払えないと言ったら、そのヘリ、Uターンして帰ると言うんですよ。そこまで海外はやるんだと驚きましたけれども。

でも、要するにレスキューする側のリスクもあるじゃないですか。これはヘリも落ちますからね。レスキュー中に、要するに、特に遭難というのは天気が悪かったりとか岩場とか、そもそも難しいところで人は遭難しやすいんですね。そこでレスキューに行く側の負担も相当あるので、だから、県警だからといってただと思わないほうがいいですよ。だから本当に、これは多分、国の法律の話なので、県警のヘリで捜索費というのはなかなか今の状況ではとれないと思うんですけれども、ただ、いずれそれはもうとるよと。要するに、結構、なかなか大変な金額ですから。そうすると、みんな保険に入るようになると思うんですね、と僕は思いますけれどもね。

(阿部知事)

全く野口さんおっしゃるとおりだと私も思っていて、やっぱり救助に当たっている隊員の話の話を聞くと、最近ちょっとこんな、この程度で要請されているのかなというように事例が出てきているようなんですね。これ山岳救助に限らず、そもそも救急車の要請からしてだんだん変わってきてしまっているんで、どうもやっぱり社会全体が、何とか、結局、救急車の出動にしても、県警なり消防防災のヘリにしてもみんな税金で

賄っているわけですから、どうもそこら辺が何か、意識が希薄になってきているなというふうに思っています。

私なんかは有料化、検討したほうがいいと思っている側ですけれども、ただやっぱり、いや救急車が無料なのに、山岳に救助に行くのは有料というのはいかがなものかというような感覚がどうも国にはあって、なかなかそこはあまり進んでいない状況ですけれども、そろそろ、これ行政のヘリだけじゃなくて、遭対協とかが救助に行けば実費はもらうようになっていますね。

(山口孝氏)

そうですね、我々山小屋の者が救助隊として行くときは、一人一応、出た場合には3万円ぐらいの出動費をいただくので。県警のヘリで、県のヘリだからただだということで、それはもうお金はかからないんですが。一応、いろいろと我々が現場へ行って、そこでヘリが来て、ぶら下がるまではそこでずっと待機したり、そういう出動費は別途、その遭難者からいただくということで、保険には絶対入ったほうがいいと思います。

私もずっと入っていますけれども、年間5,000円で、1年間の山の保険が出ますし、最高で200万円か300万円ぐらい出る保険、今、そこで受付の横でやっていますが、レスキュー保険という会社がありまして、私はそこに入っているんです。そうすると、もうそれで全部ケアできているので、私も含めて、夏山常駐隊の隊員も結構、その保険に入っている人は多いです。やっぱり隊員も救助に行って、二重遭難した場合はまた別なんですけど、自分もけがした場合のことを考えて、みんなそういう保険に入っています。皆さんもぜひお入りになったほうがいいと思います。

(阿部知事)

これぜひ、何というか、もちろん遭難した方を救助するというのは我々の責任でもあるので、そこはしっかりやらなければいけないと思っています。ただ、やっぱり自己責任において山に入られて、あまりにも安易な要請はいかがなものかということと、やっぱり、その捜索救助に行かれる方も、ある意味、命がけになる場合もあるわけですから、そういうことをやっぱりちゃんと十分ご理解いただいた上で、少なくとも費用の部分についてはちゃんと保険に入っていて、しっかりそういうところから賄えるようなことを前提に、山で楽しんでいただきたいなというふうに思います。

(鈴木コーディネーター)

どうもありがとうございます。時間が過ぎてしまったんですけれども、どうしてもという方はおられません。よろしいですか、では、短めにすみません。

(女性)

信濃町から来ました。

今、山へ登ることが結構、話題になっていたんですが、さっき知事がアウトドア県にしたいという話があって、私もずっと、山へ登りたいがために、今、話題になっていた中学校の登山にずっと同行していた者なんですけど、やっぱりそういう登山が減ってきて

すごく残念だと思うんですが、このところ、結構地震とかいろいろあって、今、オール電気とか、そういう電気とかガスとかないと何もできないような生活がやっぱり日本全国でなっている中で、やっぱり山へ登らなくてもキャンプとか、そういうことをやっぱり中学とか高校とかの中でとり入れてもらって、ぜひ飯ごうでご飯が炊ける。今、マッチをすれない子どもがすごくたくさんいますよね、でも、マッチをすって飯ごうでご飯を炊けるような、やっぱり子どもをこれから育てていってほしいなと思うので。

山へ登らなくても、アウトドア、キャンプとか、そういうのをぜひ学校の中でやっていってほしいなと思ったので、一言、すみません、時間がないのに言わせていただきました。ありがとうございました。

(鈴木コーディネーター)

野口さん、短めに。

(野口健氏)

やっぱりアウトドア県であるわけじゃないですか、僕、多分、中学校でも高校でもいと思うんですけども、うちのスタッフがニュージーランドの高校を出て、今、ここにいるんですけども。うちのスタッフが言っていたのが、ニュージーランドの高校にアウトドアという授業があるというんですよ。授業で、学校の授業で。テントの張り方も共同生活も学校の授業の中にあって、それがすごく人気のコースなんですって。ですから、本当にこの長野県はアウトドア県ということをやっぴりうたっていくときに、学校教育の中でアウトドアという授業を入れていくと、非常にいいと思うんです。

先ほどお話した震災にもこれはつながってくると思うんですけども、熊本で震災があって、僕、ずっと向こうでテント村を、約600人、生活できるテント村を1カ月半やってきましたけれども、やっぱりテント生活をしたことがない人が圧倒的に多いですよ。それで海外の場合に、ヨーロッパもそうなんですけれども、震災時におけるテント村というのはかなり主流なんですって。ただ、ヨーロッパの場合は土日とか、要するに家族でテント生活、テントとかが多いんです、ニュージーランドも非常に多いと。ですから、日常的にアウトドア生活が慣れている人たちは震災のときは強いですよ。

ですから本当に各家に、日本なんかはこれだけ地震が多いのでテントがあれば、この国は震災のときさえクリアすれば、生き延びれば自力で多分、3日4日生存できれば何とかなるんですね。ですから、地震が多い日本だとすると、なおアウトドアというのは日常的にもっと、距離が短くてもいいんだろうなと思いますね。

(鈴木コーディネーター)

ありがとうございます。知事、今のことも含めて、実はもう時間が過ぎておりますので、最後に総括をお願いしたいんですが、ちょこっと今のお話をまとめていただいて。

(阿部知事)

すみません。この間、モンベルの辰野会長から遭対協へウエアを贈呈いただいたときに、辰野会長とも話したんですけども、まさに今と同じ話をされていました。要するにアウトドア、環境の問題、子どもの問題、それから健康にいいというそういう問題、

あるいは地域の産業、観光活性化と、あわせて災害対応という切り口があるのではないかというふうにおっしゃってしまっていて、これは私も大変重要だと思っています。私は、長野県と例えば東京都を比べたときに、どちらの地域のほうが強いかといったら、私は長野県のほうが確実に強いと思っています。

災害が起きて何か一つ歯車が狂えば、東京はこの間の、この間というか、東日本大震災の後の帰宅難民のように、ちょっと歯車が狂っただけでも大混乱します。長野県はそういう意味では、実は災害に対しては強靭性をもともと持っているところだと思います。それをさらに進める上では、今、野口さんおっしゃっていただいたように、もっとアウトドアに常日ごろから親しんでいくことが実は災害への対応力を高めていくということにもつながるといふふうに思います。

この山の話、私はやっぱり、繰り返しになりますけれども、環境を考えるきっかけにもなります。子育てをどうするかということにもつながる。そして、長寿県の長野が健康づくりをしていく上でも大変重要、さらには今の災害対応にも大事だし、そして観光を初めとする地域経済にも大変大きく貢献する。

そういう意味で、この山をこれからもキーワードに、切り口にして長野県のさまざまな取組を進めていきたいというふうに思っていますので、今日は皆様方から非常に教えられることがたくさんあって、やらなければいけないことがいっぱいあるなということに改めて実感しましたので、早速、信州大学の学生からいただいた提案も含めて、具体化に向けて取り組んでいきたいと思っています。

本当に今日はありがとうございました。

(鈴木コーディネーター)

皆様、本当にありがとうございました。今日はパネリストの皆様のみならず、会場の皆様にご協力をいただきまして本当に活発な議論ができたのではないかと考えております。若干、時間が過ぎてしまっていて、まことに申しわけございません。

それでは、最後にもう一つ、パネリストの皆さんに拍手をお願いして司会者のほうにマイクを返したいと思います。

4 閉会

(司会)

鈴木先生、野口さん、山口さん、仲川さん、阿部知事、そして会場の皆様、本当にありがとうございました。

本日は信州山岳サミットということで、「信州の山を安全に楽しむために～世界水準の山岳高原観光地へ～」をテーマに進めてまいりました。信州の山の魅力と山の安全、山岳環境、そして皆さんご自身が山を楽しむことについて考えていただけましたでしょうか。そのような1日になったとすれば、私たちもうれしく思います。

最後に、皆様にお配りしました資料に入れてありますアンケートにお答えいただきまして、お帰りの際には、会場出口にてアンケートをご提出いただきますようお願いいたします。

それでは、以上をもちまして、信州山岳サミットを全てのプログラムを終了させてい

ただきます。皆様、本日は本当にありがとうございました。
お忘れ物がございませんよう、お気をつけてお帰りください。